

チェーコフ・イズ・グレート、バット…

チェーコフ作「かもめ」「ワーニャ伯父」「三人姉妹」「桜の園」より

翻訳・翻案・構成 木内宏昌

このテキストは、チェーホフ四大戯曲から若い恋人たちの場面（エピソード）を、「かもめ」「ワーニャ伯父」「三人姉妹」「桜の園」の各一〜四幕から抜粋し、全十九場で構成・翻案しています。

台詞は、原作からの翻訳および翻案を基本とし、随所に歌の挿入、後半には登場人物が物語の枠を越えて突然に台詞を発したり、登場することがあります。

タイトルにおいてチェーホフを「チェーコフ」としているとおり、登場人物名は英語発音を基本として表記しています。

舞台は、コースチャ（「かもめ」のトレープレフ）の劇場です。すべての恋愛場面がそこで演じられ、演者以外がそれを観ています。そして時折、台詞を発します。

すべての劇が演じ終わると、「桜の園」の終幕場面とともに、人びとは劇場を去っていきます。

登場人物

『かもめ』より

コースチャ（トレープレフ）★

ニーナ☆

マーシャ☆

セミヨーン（メドヴェージェンコ）★

トリゴーリン★

『ワーニャ伯父さん』より

ソーニャ☆

エレーナ☆

アーストロフ★

ワーニャ★

『三人姉妹』より

ナターリヤ☆

アンドレ★

オーリガ☆

マーシャ☆

イリーナ☆

ヴェルシーニン★

トウーゼンバツハ★

フョードル（クルイギン）★

『桜の園』より

ドウニヤーシヤ☆

ヤーシヤ★

エピホードフ★

ロパーヒン★

ヴァーリヤ☆

アーニヤ☆

ペーチャ（トロフィーモフ）★

☆は原作の女性、★は原作の男性。上演はその別にこだわらない。また、ひとりが複数の役を兼ねたり、ひとつの役を複数の俳優で演じることなどはまったく自由。

一幕一場 「かもめ」 1幕より

サイモン

どうしていつも黒い服なの？

マリア

これは喪服。

あたしの人生真っ暗だから。

サイモン

どうして？

マリア、きみは病気でもないし、

お父さんは大金持ちとは言わないまでも裕福だし。

ぼくのほうがよほど悲惨だ――

月給わずか二十三万五千。

そこから退職積立金が天引きされる。

それでもお先真っ暗とは思わない。(ふたり、座る)

マリア

おカネなんて関係ない、

貧乏だって幸せになれるはずよ。

サイモン

理屈ではそう。

でも現実はどうかな？

ウチには母親と、妹ふたりと、幼い弟がいて。

毎月二十三万五千からあれこれ引かれて、

それでどうやって食べていく？

(仮設舞台を振り返って) いよいよだわ、幕があがる。

マリア

サイモン

ああ、出演ニーナ・ザレーチナヤ！

脚本コンスタンチン・トレープレフ！

愛し合うふたりの魂は今宵融け合い、

ひとつの作品として形をなす。

それにひきかえ、ぼくらの魂は触れ合いもしない…

ぼくはきみを愛してる。

きみを想うと居ても立ってもいられなくて、

毎日二時間十五分歩いてやって来る、

だけどその報酬はきみの冷たい目。

それもそうだ―

カネもないのに養わなくちゃならない家族が大勢。

こんな甲斐性なしとだれが結婚なんか！…

やめて、そんな話。(嗅ぎタバコを吸う)

なんだよ、それ？

嗅ぎタバコ。

ああ…

力説してもらったのに悪いけど、

応えてあげられないから―

マリア…

(タバコをすすめて) よかったらどうぞ。

あんまり好きじゃないんで。

(間) ああ、なんか苛つく…

あなたって、いつもおカネの話。

貧乏がいちばん不幸だと考えてるようだけど、

あたしに比べればホームレスのほうがずっとまし―

コースチャ

(登場して) ふたりとも、ちよつとごめん、

そこにいられるとまずいんだ。

幕が開くときまた呼ぶから。

マリア
行くわよ、サイモン。(退場)

サイモン
(コースチャに) 始めるときは必ず知らせて！(退場)

コースチャ

(仮設舞台を見ながら) これがぼくたちの劇場です。

なにもない空間―湖と地平線に向って開かれてる。

開演は午後八時三〇分、月がのぼる時刻。

だけどニーナが遅れたらすべてが台無し。

彼女、父親と継母に監視されていて、

なかなか家から出してもらえないんです、

脱獄に成功すればいいけど…

そしてぼくのママはきょうも不機嫌。

今夜出演するのが自分じゃなくてニーナだから。

(時計を見る) いま、新しい演劇が必要なんです、

この時代にふさわしい新しい形式が！

ママのことは好きですよ、大好きだけど、

でも、いまは愛人とべったり。

新聞にスキヤンダル記事が載るたび吐き気がする。

母親が普通の女性だったらどんなに平和だったか…

でも、現実的にも社会的にも、

ぼくは大女優イリーナ・アルカージナの息子です。

それ以外に何者とも言えるわけじゃない。

大学を三年で中退、特技なし、賞罰なし。

凡人と言われたら返す言葉もない。

今回、ママが連れて来た愛人、人気作家なんです。

まだ四〇にもならないのに名声を得て、

この世に望むものはなにもないだろうって感じ。

なんて言ったらいいかなあー

魅力的で、上手いんですよ…

ボリス・トリゴリン。

(耳を澄まして) やっと来ました…

足音まで愛しい、ぼくのニーナ！

ニーナ (登場して) コースチャ！

遅くなってごめんなさい！

コースチャ ああ、だいじょうぶ。

なかなか抜け出せなくて。

やっとパパが出かけてくれたからー継母と。

でも三〇分で帰らないとーすぐに始めましょう。

ここにいるのがバレたらたいへんなの、

わたしが演劇に近づくのを恐れてるみたい。

でもわたしはどうしても引き寄せられる、

コースチャ
ニーナ
コースチャ

この湖に：真っ白なかもめみたいに—
？（あたりを見る）
どうしたの？ ふたりきりだよ。
向こうにだれかいる気がしたから。
いや、だれもない。

M「お芝居には恋がなくちゃ」

ニーナ
コースチャ
ニーナ
コースチャ

あれはなんの樹？
楡の樹だけど：（マリア、隠れて）
どうしてあんなに暗いのかしら？
夕暮れだからそう見えるんだ。
今夜、きみのところへ行く。
無理よ、会えない。

ニーナ
コースチャ
ニーナ
コースチャ

ひと晩じゅう庭からきみの窓を見てるから。
ウチのだれかに捕まるわ。
きみが好きなんだ。
しーっ！

ニーナ
コースチャ
ニーナ

（足音を聞いて）ウチの連中だ—緊張する？
とっつても…
あなたのママは怖くないけど—
ボリス・トリゴリンがいると思うと
胸が張り裂けそう。

コースチャ
ニーナ
コースチャ

だって有名な作家でしょ！
ああ…
書くものみんなすばらしいわ！
（冷やかに）そうかな…読んだことなくて。

ニーナ

♪ あのひとが描くのは 恋物語

運命の出会い とわの別れ

ほんのひととき生きる 別の人生
ページを開けば 夢のなかへ

もうひとりの わたしがいて
めくるめくロマンス かなえる
泣きたい夜には 涙の歌を
恋するひとには 惜しみなく愛を

ニーナ
でもあなたの脚本は…難しい。

コースチャ
♪ ぼくが描くのは まだ見ぬ世界

だれも知らない 魂のゆくえ
ときの果てにある 孤独と叫び
ぼくにはいらぬ ドラマやロマンス

ニーナ
♪ この舞台 あなたのこと 信じて立つわ
そこにいてね 祈っててね うまくゆくように

コースチャ
始めよう、開演だ。

ニーナ
♪ あのひとどこで 見てるだろう？

人びと
♪ ラララ ラララララ ラララララララ
ララララ ララララ ラララララララ
今夜 幕開ける ふたりの舞台
水辺に きらめく 月明かりを背に

(Mのあいだにニーナは舞台裏へ。人びと、登場)

コースチャ

(杖で地面を叩き) みなさん、時間です。
湖の夜に漂う古き時代の聖なる影よ、
われらを眠りへ誘い、夢に見せてくれ、
二〇万年先の世界を！

「二〇万年先だって！…」

「だれが生き残ってるもんか」

「バカバカしい」

コースチャ

いいでしょう、その世界をご覧に入れます。

「どうぞ始めて！」

「眠ってるから！」

(幕が上がる)

ニーナ

ヒトもライオンもダチョウも雷鳥も
角を生やした鹿もガチョウもクモも

水にすむ無言の魚も目に見えないあらゆる生物も、
生きとし生けるものはみな、

哀しみの繰り返しを止めて死に絶えた。

地球が命を生み出さなくなってから何千もの世紀を経て、
いま、あわれな月明かりが虚しく灯る。

湿原には目を覚ますツルの啼き声もなく、
菩提樹の林には黄金虫の羽音もない。

あるのは寒さと寒さと寒さ。

空虚と空虚と空虚。恐怖と恐怖と恐怖。

「これってなんなの？…」

「ゲンダイテキっていうやつじゃないかしら？…」

「さあ…」

コースチャ

お静かに！

ニーナ

生き物たちの肉体は塵となり、

永遠の物質が石や水や雲に変えた。

しかしひとつに溶け合った魂が残る。

宇宙にただひとつの魂、それがわたし。わたし。

この体には、アレクサンダー大王の、

ジュリアス・シーザーの、シェイクスピアの、

ナポレオンの、そして最も下等なヒルの魂も、

ひとつ残らず生きています。

「ずっとこれが続くわけ？」

「原子とか言っちゃって…」

「眠くなってきた…」

コースチャ

しーっ！

ニーナ

ヒトの意識が動物の本能と混ざり合っている。

わたしはすべて、すべて、すべて覚えている。

ひとつひとつの命を自分の命として生きている。

「寒くなって来た…」

「風邪ひきそう…」

「着るものにとってこようか…」

「じゃあわたしが行ってくる…」

「いいよわたしがとってくる」

ニーナ

わたしはひとり。

百年に一度唇を開くと、声はただうつろに響き、

聴く者はだれもない。

おまえたち青白い炎さえも聴いてはいない。

コースチャ

(頭に来て、大声で) もういい！ 芝居は終わりだ！
幕だ！ 幕を下ろせ！ (足を踏み鳴らし)
幕！

(幕が下りる)

コースチャ

大間違いだった、
芝居を書いたり演じたりっていうのは、
特別なひとたちにか許されないことだった…
すっかり忘れてたよ！
でも、ぼくは—クソ！

(人びと、笑う。)

コースチャ、ニーナを残して退場)

ニーナ

トリゴーリンさんですか？

(人びと、退場)

ニーナ

はじめまして— (どきまぎして)
いつも拝見しています、あなたの作品—

トリゴーリン

それはどうも…

変わったお芝居でしたでしょ？
ただしゃべってるだけで…

ニーナ

トリゴーリン

いや、楽しみましたよ。
きみの演技はよかったし、
なにより背景がいいですね。 (間)
この湖、魚がいそうだなあ。

ニーナ　それはもうたくさん。

トリゴーリン　ぼくは釣りが趣味なんです。

一日の終わりに水辺に腰を下ろして、
ぼんやり浮きを眺めてるのが楽しみです。

ニーナ　創造的なお仕事をしたあとに、

それ以上の楽しみがあるなんて…

トリゴーリン

え？

ニーナ　いま何時ですか？

トリゴーリン　もうすぐ九時半になりますね。

ニーナ　たいへん！…ごめんなさい、

できればもっとここにいたいんですが、
失礼します。(退場)

トリゴーリン

？…

一幕二場 「ワーニヤ伯父」 一幕より

アーストロフ　この十年、働きすぎですっかり人間が変わってしまいました。

朝から晩まで立ちどおしで休む間もありやしない。

夜中は夜中で患者から呼び出しが来やしまいかと、

びくびくしながら暮らしてる。

これじゃ、老けずにいるというほうが無理というもんだ。

人間らしい感覚もだいぶ鈍ってきた。

なんにも欲しくない、だれも要らない、

家族や女がいるわけでもない。

この春の初め、チフスがはやった村へ行った―

農家は軒なみ病人がごろごろして、

床には仔牛や子豚が病人と同居してた。

一服する間もなく患者を診て、

やっと家へ帰ったと思ったら鉄道夫が担ぎ込まれて来た。

手術をしようと台の上へ寝かせたら、

その瞬間ころりと死んでしまった。

そんなときだけ人間らしい感情が目をさまして、

まるで自分がその男を殺したみたいに気が咎めた。

坐りこんで目をつぶってこう考えた―

百年後、二百年後に生まれてくる人間たちは、

いまこうやってあくせく働くわれわれを、

ありがたいと思ってくれるだろうか―

そんなこと思っちゃくれないだろう。

ワーニヤ (だらけた様子で登場して) ああ…んん…

アーストロフ よく寝たかい、ワーニヤくん？

ワーニヤ ああ。ぐっすり(あくび)。

教授ご夫妻が来てから生活がすっかり狂っちまった。

妙な時間に眠ったり、

得体の知れないものを食わされたり飲まされたり、

すること為すこと不健康なことだらけ。

いまやこのウチで働くのはソーニヤひとり、

ぼくは食う、寝る、飲む、寝る…さっぱりいかん。

アーストロフ あの夫婦は当分いるのか？

ワーニヤ ありやあ居座るつもりだ、百年くらいね！

ほうら、向こうに奥方が…なんて美人なんだ。

十年前から知ってるがあれほどの美人見たことがない。

(夢みるように) あの目つき…なんとも言えないねえ。

ほかにいい話はないのか、ワーニヤ。

(だるそうに) いい話って？

耳新しいこと。

ないね。新しいことなんてなにひとつ。

毎日怠けてブツブツ言ってるだけだからね、

もうろく親爺みたいに！

引退した大学教授：

痛風、リユーマチ、頭痛もち。

その大先生が死んだ前妻の実家に

転がりこんで来たってわけだ。

自分ほど不幸な男はないとこぼしてるが、

あれほど運のいい男がいるもんか。

(いらいらした調子で) なんて運のいい奴！

国のカネで勉強させてもらった上に、

大学教授の椅子にありついて、

枢密院議員の婿殿におさまった！

そこまではまあいい、問題はつぎだ。

丸二十五年、芸術だの文学だのと論じてきた男が、

文学も芸術もわかっちゃいないという事実。

リアリズムだナチュラリズムだと

ほざいてきたのは一から十まで

他人の受け売りにすぎなかったって話さ。

つまりあいつに仕えてきたおれの二十五年は、

泡ぶくだったというわけだ。

なのになんだ、あの思い上がりは！

要するにきみはやっかんてるんだろ？

ああ、やっかんてるとも。

あいつの女運のいいことにね。

前妻だったぼくの妹は天使のような女性だった。

妹が死んだあと、後妻になった女がまた才色兼備！

あの老ぼれに若さと美貌を捧げて！

なぜだ、さっぱりわからん。

こっそり浮気してるとか？

残念ながら、それはないね。

残念ながら？

アーストロフ

ワニーヤ

アーストロフ

ワニーヤ

アーストロフ

ワーニャ

そうとも。あの身持ちの固さは理不尽だ。

ソーニャ

(登場して)お茶は、あたしが：

エレーナ

ありがとう、ソーニャ。(飲む)

アーストロフ

(エレーナに)ご主人の診察に伺いましたが、
ぴんぴんしてますね。

お手紙ではだいぶ悪そうでしたから
慌ててやって来たんですが：

エレーナ

ゆうべはずいぶん痛がりました：
なのいきょうはもうけろりと。

毎日様子が変わりまして：

アーストロフ

ええ、それはよくあることです。

では、今夜お宅に泊めてもらうわけにいきませんか？

あすの様子を見せてもらってから帰る

というのはどうでしょう？

ソーニャ

そうしてください！

お泊りになるなんて滅多にないことですもの。

それに、おひる、まだでしょう？

アーストロフ

ええ、じつはまだ：

ソーニャ

召し上がって。

ウチではこのごろ、おひるはゆっくりなんです。

(お茶を飲んで) まあ、冷めちゃってる！

エレーナ

いいお天気ね、きょうは。暑くもないし：

ワーニャ

こんな日に首を吊ったら気持ちよく死ねるだろうなあ。

ソーニャ

伯父さん、面白くない、そんな話！

ワーニャ

フン、少し前はぼくも明るい人間だったんだ。

学問と屁理屈で目をふさぎ、

現実を見まいとしてきたからねーところが今、

若さを無駄にしてこの歳になったことに気づいたら、

腹が立って腹が立って夜もおちおち眠れやしない。

いまとなつてはもう、

なにひとつ手に入れることができないんだ！

ソーニャ おねがい、やめて！

ワーニャ 仕事をしていればよかったか？

だが人間みんながみんなあの大先生のように
物書きマシンになれるとは限らないからね。

ソーニャ ワーニャ伯父さん！

ワーニャ 黙るよ。あやまる。

「アーストロフ先生、お迎えが参りました―
病院のお車です」

アーストロフ (いまいましげに) 患者です―行かなくちゃ。

ソーニャ (帽子を目で捜す) くそつたれ。

残念。

ご用が済んだらいらしてください。

アーストロフ いや、遅くなるでしょう。

戻るなんて、とても…

(エレーナに) そのうちソーニャさんとも、

わたしのところへお立寄りを。

ご興味があれば、模範的な庭や林をごらんに入れます。

わたしが森番のまねごとをして苗木を育ててるんです。

それはすばらしいことでしょうけれど、

本職のお邪魔にはなりませんの？

お医者さまでいらっしゃるのに。

なにが本職かは神のみぞ知るです。

じゃあ、楽しんでいらっしゃる？

ええ、楽しんでます。

(皮肉に) すこぶる楽しんでるでしょうな！

(アーストロフに) もしもあたしが

エレーナ

アーストロフ

エレーナ

アーストロフ

ワーニャ

エレーナ

ソーニャ

森や林のことばかりになったら退屈だと思わね。
アーストロフ先生は表彰されるくらいなの、
毎年あたらしい林を育てて。

それにこんなふうにお考えなの、
森林はこの地上を美しく飾って、
人間に自然の美を教え、

豊かな気持を吹きこんでくれるって。

ワーニャ

(笑いながら) そりゃあそうかもしれないが、
森の番人に反論の余地がないわけじゃない。
薪を割って暖をとったり、

材木で家を建てることはお許しねがいたいね。

アーストロフ

ストーブの燃料はほかにもあるし、
小屋なら石でも造れる。

必要な木を伐るのには反対はしないが、
森を根絶やしにする必要がどこにある？

いまや世界じゅうの森はめりめり音を立て、

何十億本という木が減びつつある、

鳥や獣や川、すばらしい景色は消えてまた返らず。

それは人間というやつが生まれついで、
無精者で、
森林を育てる才能がないからだ。

(エレーナに) そうでしょう、奥さん。

あれほど美しいものをストーブで燃やし、

自ら創り出せないものを滅ぼしてしまうような乱暴は、
無分別な野蛮人のすることです。

人間は理性と創造力を授かっている――

与えられたものを殖やせという神の思召しです。

ところが人間は殖やすどころか、ぶち壊してばかり。

森は削られ、河は涸れ、鳥は消えていく。

気候はだんだん荒れて、土地は痩せて醜くなってゆく。

(ワーニャに) ほら、きみはまた皮肉な目でぼくを見てる。

現実的じゃないという批判だろ？

しかし自分で植えた若木の林が風にざわめくのを聞くと、自然というものを、多少なりとも、

この力で左右できると思えるんだ。（お茶を飲む）

もう行かないと。

たしかに、なにひとつ現実的じゃないかもしれないがね。

それではみなさん、ご機嫌よう！

（彼と腕を組んで）今度はいつ来てくださいますか？

（去りながら）わかりません。

また来月くらい？（ふたり、去る）

ソーニャ

アーストロフ

ソーニャ

エレーナ

（ワーニャに）あなたのご機嫌が悪いのはウチのひとのせいなのはわかってるわ。

悪い人間じゃないのはごぞんじでしょう？

ぼくがただあなたのご主人を憎んでいると思ってるのか！

自分の顔や立ち振舞いを見るといい―

あなたは辛そうだ！

じつになんとも、辛そうだ！

あの老いぼれのそばにいる人間はみんな辛くなる。

ぼくが言いたかったのはそういうことだ。

ええ、そりゃあ辛くて退屈。

みんな主人の悪口ばかり言っつて、

あたしを気の毒そうな目で見るわ。

あんな年寄りを夫にしてかわいそうにと言わんばかり。

よくわかってる！

さつき、アーストロフ先生も仰しやったとおり、

みんな手当たり次第に森を枯らすせいで、

もうすぐ地上は丸坊主。

同じようにあなたがたは人間を枯らしてる。

どうして自分の女でもないのに

あたしのことをとかく言うの？

それもアーストロフ先生の言うとおりかもしれない――

あなたがたは胸の内に破壊の悪魔を飼ってるから。

森も惜しくない、鳥も、女も、お互いの命も、

なにひとつ大事なものはないんだわ：

そんな哲学、ぼくは嫌いだね！

ワーニャ
エレーナ
ねえワーニャさん、あなたとあたしが仲良しなものも、

ふたりともわびしい人間だからじゃないかしら。

ほんとうに暗い顔をしてる：

あたしを見ないで！

ワーニャ
じゃあほかになにを眺めろっていうんだ、

こんなにあなたが好きなのに！

あなたはぼくの悦びだ。命だ、青春だ！

もちろん、あなたにその気がないのはわかってる。

でもぼくはなにもいらぬ。

ただあなたの顔を眺め、

あなたの声を聞くことさえできれば：

エレーナ
ワーニャ
しっ、人に聞こえる！（去ろうとする）

（追いながら）好きだと言っちゃいけないのか？

そう邪険にしないでくれよ。

あなたといるだけで幸せなんだ。

エレーナ
そんなこと言われたって、

返せる言葉はなにもないの！

わかってるでしょ！

♪ 恋をすればひとは 生まれ変わる

（ふたり、去る）

一幕三場 「三人姉妹」 1幕より

M「マーシヤの口笛（仮）」

♪ ララララララララララ

ララララララ ラララララ

ララララララララララ

ララララララ ラララララ

オーリガ

お父さまが亡くなったのはちょうど一年前。

去年の五月五日、あなたの誕生日だったわね、イリーナ。

あのときも柱時計が十二時を告げて…

お父さまの棺が運ばれていった。

イリーナ

オーリガは思い出話ばかり。

オーリガ

きょうは窓を開けておけるくらい温かい。

お父さまといっしょにモスクワを離れて十一年。

いまごろモスクワは素晴らしい季節よ。

「なにを、バカバカしい！」

「くだらん話だ」

マーシヤ

(口笛) …

オーリガ

マーシヤ、口笛はよしなさい。

はしたない！（間）

わたしは毎日学校勤め、それが終われば家庭教師。
いつも頭痛がして、考えかたまで老け込んだわ。

一日一日、体から若さが抜け落ちていく感じ。

ふくらんでいくのはひとつの夢だけ…

イリーナ

モスクワへでしょー

この家を売ってモスクワへ。

オーリガ

そうよ、モスクワへ。一日も早くね。

(別室から笑い声)

イリーナ

きつとかなうわ、大丈夫。

きょうはそう思える。

だってわたしの誕生日だもの。

オーリガ

ほんとにきょうのあなたはキラキラしてる。

トウーゼンバツハ

(別室の同僚に) またバカなことを!

きみたちの話はもうたくさんだ!

(姉妹たちに) あの、言い忘れていましたが、

きょうはこちらに來客があります—

新しく赴任した中隊長のヴェルシーニンが。

オーリガ

それは大歓迎。

イリーナ

中隊長っていうことはあんまり若いひとじゃないかしら?

トウーゼンバツハ

ええ、でも評判のいい人物で頭もいい—

ただし、おしゃべりなのが珠に傷。

イリーナ

面白いひと?

トウーゼンバツハ

それはもう…

家族は奥さんとその母親と娘がふたり。

結婚は二度目。

どこへ行っても中隊長はこう言うんです、

「わたしには妻とふたりの娘がいます」って。

ここでもきつとやるでしょう。

で、その奥さんっていうのが問題で。

女学生みたいに長いお下げ髪で、

しょっちゅう自殺騒ぎを起こすんです。

それもこれも夫への嫌がらせ。

ぼくならとつくに別れてますよ。

イリーナ

わたしはきょうとっても幸せなの。

朝起きて顔を洗ったら、

突然、この世のなかのなにもかもがはつきりして、人生をどう生きたらいいかわかったような気がした。

いい？ 人間は働かなければならない！

額に汗して仕事をしなければ、

人生の目的や日々の幸せを見いだせないって！

昼ごろに目覚めて、ベッドでコーヒーを飲んで、

化粧と着替えに二時間もかける生活なんて、

ああ、ぞっとする。

わたしね、働きたくて働きたくてしかたないのー

オーリガ

ウチは朝七時に起きるようにしつけられてきましたけど、

起こされてから二時間、

いつもベッドのなかでぐずぐずしてるのはだれかしら？

イリーナ

それは子ども時代のわたし。

でもお忘れなく、きょう二十歳になりましたから！

トゥーゼンバツハ

わかるなあ、労働へのあこがれ。

ぼくはこれまで一度も働いたことがありません。

労働とは無縁の男爵家に生まれ、

ぐうたらな都会に育ちました。

学校から帰ると召使いがブーツを脱がせ、

着替えを手伝ってくれる家でした。

しかし貴族が貴族でいられる時代はもうお終いだ。

力強く健全な革命の嵐が確実に近づいています。

労働に対する偏見を吹き飛ばすでしょう。

ぼくは働きます。

あと二、三〇年すれば人間はみんな働くようになります、この国のひとり残らず！

マーシャ

あたし、帰る。

オーリガ

マーシャ？

イリーナ そんなのないわ。

トウゼンバツハ バースデーパーティーは？

マーシヤ じゃあね、イリーナ。夕方また来るから。(キス)

あとでちゃんとおしゃべりしましょう。

イリーナ おかしなマーシヤ。

オーリガ (涙目で) わかってるわ、わたしには。

マーシヤ 泣かないで！

ヴェルシーニン (登場して) お邪魔します、ヴェルシーニンです。

やっとお目にかかれました。

イリーナ こちらこそ！

どうぞおかけください。

オーリガ ようこそお越しくございました。

ヴェルシーニン 驚きだ！

すっかり大人になりましたね！

あなたがたはプロゾロフ將軍の三人姉妹！

三人だったのははっきり憶えてる。

オーリガ：マーシヤ：イリーナ：

トウゼンバツハ 中隊長はモスクワからおいじになったんですよ。

イリーナ モスクワ？ モスクワからいらしたんですか！

ヴェルシーニン ええ。大学も、軍の配属先もモスクワでした。

(マーシヤに) あなたのお顔はうつすら覚えがある。

マーシヤ あたしは全然！

ヴェルシーニン お父上がわたしの指揮官だったとき、

お宅によくお邪魔しました。

イリーナ モスクワからお客さまなんて、

これって奇遇ね。

オーリガ モスクワへ引越しを考慮してるんです。

イリーナ 秋にはわたしたちが生まれ育った町に―

オーリガ&イリーナ 旧バスマンナヤ通り！…(笑う)

マーシャ

(生き生きとして) 思い出した!

ねえ、オーリヤ、憶えてない?

あたしたちよく噂話をしたじゃない—恋狂いの少佐って!

あなたはあのころ中尉でだれかに恋をしていらしたわ。

それでみんな、なぜかあなたを少佐って言うてからかった。

ヴェルシーニン

(笑って) そうでしたね: 恋狂いの少佐、

そう呼ばれていました。

ヴェルシーニン

みなさんはモスクワを離れてどのくらいに?

イリーナ

十一年になります!

マーシャ

モスクワはどちらにお住まいだったんですか?

ヴェルシーニン

旧バスマンナヤ通りに。

オーリガ

おなじだわ、わたしたちと:

ヴェルシーニン

向こうに比べるとここはいい。

広大な大地を流れる堂々たる川:

思い出しました、あなたのことははっきりと。

ヴェルシーニン

わたしも: 母上のことを。

マーシャ

ああ、ママの顔を忘れかけてる。

いつまでも憶えているわけじゃないのね—

きつとあたしたちも忘れられてしまうんだわ。

ヴェルシーニン

そう、いつか忘れられてしまう—

それがわたしたちの運命です。

いま現在大切なものも、

時がたてばどうでもいいものになる。

将来、なにが最先端でなにが時代遅れになるか、

いまのわれわれには見当もつきません。

生活様式だってどう変わるか—

今日の常識がいつかは非常識になるかもしれませぬ。

トウゼンバツハ

さあ、それはどうでしょうか:

今日の生活こそ最先端と言われるかもしれませんが、

たとえ悩み苦しみは絶えなくとも、

ヴェルシーニン

昔に比べればどれほど進歩したことか。もしもこの地方に一〇万の人がいて、あなたがたのように教養のある女性が三人しかいなかったとします。だからといってあなたがた三人は、一〇万の群衆に飲み込まれていくわけじゃない。あなたがたのあとに、

あなたがたのような人間たちが続くんです。

それは六人、十二人と増えてゆき、やがていつかは多数派になるでしょう。

そして百年後には想像もつかないほど美しい暮らしがこの町におとずれるはずですよ。

人間は知性と教養のある暮らしをしなければいけません。

祖父や父が見たものより多くを見なければいけません。

あなたがたの知性と教養は決して無駄なものじゃない。

あたし、ここにすることにするわ。

マーシャ

イリーナ

トゥーゼンバツハ

いまのお話、書きとめておきたい…百年後の美しい暮らしのために、

人間たちは準備しなければなりません。

それは労働することです。

ぼくたちの人生に必要なのは新しい生活様式です—

ぼくはそう考えます。

もしも人生をやり直すことができたなら—

わたしならこのように、

花にあふれ、光に満ちた家を建てます。

じつはわたしには妻とふたりの娘がいます…

その妻というのが体が弱く、いろいろありまして…

もしも一からやり直せるなら、

二度と結婚はしないでしよう。

いや、結婚はしないな。

(フョードル／クルイギン、登場)

フョードル

ハッピーバースデー、イリーナ！

はい、これ、プレゼントー

ぼくが書いたわが校の五〇年史だ。

やあ、みなさん、こんにちは。

(ヴェルシーニンに) はじめまして、

フョードル・クルイギンです。

この土地で高校教師をしています。

文官七等官、軍人で言えば中佐でしょうか。

ヴェルシーニン

これはどうも。

ヴェルシーニンです。

フョードル

(イリーナに) いいかい、この本にはね、

五〇年分の卒業生名簿が載ってるんだ。

「われ全力を尽くせり、しのぐ者あらば試みよ」

マーシャ：(キス)

イリーナ

イースターにも同じ本をもらったわ。

フョードル

え、まさか！

じゃあ、返してもらおう。

ヴェルシーニンさんに差し上げます。

どうぞ、お暇なときに読んでください。

ありがとうございます。

フョードル

妻のマーシャは夫のぼくを愛しています。

きょうは陽気もいいし、気分もいい。

夕方からは校長のお宅で食事会だ。

マーシャ

：

オーリガ

それではみなさん、こちらでお食事を。

フョードル

ああ、オーリガ！

ゆうべは十一時まで働きづめで参ったよ。

でもきょうの気分はハッピーだ。(広間へ)
マーシャ (夫に聞こえないように) ああ、もううんざり。
また校長の家！ 退屈地獄が待ってる…

トウゼンバツハ ぼくだったら行きませんね。

簡単な話だ。

マーシャ 他人事だから言えるのよ。

耐えられないわ、こんな生活… (広間へ)

フォードル それではイリーナの誕生日と、

みなさんの健康を祝して！

一同 乾杯！

フォードル ヴェルシーニンさん、わたしは教育者ですが、

ここでは身内。マーシャの夫に戻ります。

妻ほどやさしい女性はそうはいません。

ヴェルシーニン ここにお邪魔していると、

わたしも身内のような思いがします。

イリーナ (離れた場所で) マーシャは機嫌が悪いの、夫婦の問題で。

十八で結婚したときはフォードルは頭がよくて、

いちばんに見えたんでしようけど。

でもいまはねえ…

オーリガ アンドレー、こっちへいらっしやい！

(ヴェルシーニンに) わたしたちの兄なんです。

オーリガ&マーシャ アンドレー！

アンドレー いま行くよ。

トウゼンバツハ (イリーナに) なにを考えてるんです？

きみは二十歳、ぼくはまだ三〇手前。

ふたりの前には果てしない月日が待ってる。

その永遠の時間、ぼくはきみを愛し続けたい。

イリーナ 悪いけど、恋愛の話はちよつと—

トウゼンバツハ (それに構わず) いまのぼくの憧れは、

生きること、戦うこと、労働すること。

それが胸のなかで、きみへの愛とひとつになりました。
きみはきれいだ。

世界をあざわらうようにきれいだ。
おかげでぼくの人生も美しく見える。

イリーナ

人生が美しい？

わたしたち姉妹には、

美しい人生なんてなかったわ。

人生はあたしたちの未来をふさいでばかり。

道に生い茂った雑草みたいに。

ナターシヤ

(登場して) イリーナ、おめでとう！ (キス)

お客さまも大勢ね。

こんなにたくさんのがいて、あたし恥ずかしい。

オーリガ

いらっしやい、ナターシヤ！

お元氣？

ナターシヤ

あたし、人前だと緊張しちゃって…

オーリガ

なに言ってるの、みんな親しい仲じゃないの。

ナターシヤ

：

フョードル

イリーナ、きみにも素敵な男性が現れるといいね—

いつでも結婚できる年齢だ。

ナターシヤにはもう相手がいるからな。

マーシヤ

(フオークで皿を叩きながら) あたしにワインちょうだい！

人生はあつという間よ！ 楽しまないと！

フョードル

行儀悪いぞ、マーシヤ。六〇点！

オーリガ

夕食はロースト・ターキーにアップルパイよ。

わたしはきょう、一日ウチにいられるの、夜もずっと。

みなさん、今夜も集まってね。

ヴェルシーニン

わたしもよろしいですか？

イリーナ

ええ、ぜひいらして。

ナターシヤ

明るくていいおウチね。

フョードル

お、このテーブルに十三人いる。

ということはこのなかでだれかひとり、
恋をしている！

(一同、笑い。ナターシャ、席を離れる)

アンドレー (追いかけて) なにも気にしないで…

堂々としていればいいんだ。

ナターシャ ごめんなさい、席を立つなんてマナー違反だけど。

… (両手で顔を覆う)

アンドレー みんな冗談を言ってるだけだから—

ほんとうはやさしい連中なんだ。

すぐにきみを大好きになる。

さあ、こっちに…

ナターシャ あたし、人前に出るのが怖い…

アンドレー ああ、ナターシャ、なんて清らかなんだ。

ぼくを信じて、信じてくれさえすればいい—

ぼくの気持ち。

ぼくの胸はきみへの愛でいっぱい。

いつからなのか、どうしてなのか、きみを愛してる。

ぼくの妻になってくれないか？

こんなに愛したのは初めてだ。(ふたり、キス)

♪ 恋をすればひとは 瞳とじる

一幕四場 「桜の園」 一幕より

ドウニヤーシャ ロパーヒンさん、居眠りですか？

ロパーヒン (目覚めて) ん？

ドウニヤーシャ 外の犬たちは眠っていませんよ、

ひと晩じゅう目はばつちり。

犬たちにはわかるんです—

マダムのお帰りが。

ロパーヒン ドウニヤーシャ？

いつもと違うな…

ドウニヤーシャ なんだかクラクラして—

いまにも倒れそう。

ロパーヒン いや、その格好だよ…

どこかのご令嬢みたいじゃないか。

ドウニヤーシャ だって…

エピホードフ (登場して、ドウニヤーシャに) に、庭師がこれを—

食堂に飾ってくださいって。

ロパーヒン ついでに、おれに飲み物を—

ドウニヤーシャ かしこまりました。(退場)

エピホードフ 凍りそうです。

ロパーヒン ん？ ああ。

エピホードフ 零下三度。

ロパーヒン そんなか？

エピホードフ 霜のなかでサクランボの花が咲いています。

どこかズレてる、それがここの気候です。

だから決断に迷いが生じる—

摘みとるべきか見送るべきか。

じつは、きのう、いや、おとといブーツを買いました。

それが、なぜかキュッキュツと音が鳴るんです。

買ったばかりのブーツが、なぜ？

ロパーヒン んん…

エピホードフ わたしの人生、毎日こうだ。

いったいどうなってるんだか。

愚痴じゃありません—

もはや慣れっことで、笑えるくらいです…

災いがなんだ！

すべての災いは人間を試してる！

ロパーヒン (ドウニヤーシヤが運んで来た飲み物を受け取りながら)

ああ、そう思うよ、おれも。

エピソードフ (ドウニヤーシヤに) じゃあ、また。

これで失礼… (行きかけて椅子にぶつかる)

ほらね？ ほら！ このとおり！

証明終わり。(退場)

ドウニヤーシヤ エピソードフさんにプロポーズされたんです。

ロパーヒン ほお。

ドウニヤーシヤ いいひとだと思っんですけど、

なにをしゃべってるのかよくわからなくて。

べつに嫌いじゃないけど、

でも…椅子にぶつかっちゃうんです。

エピソードフさんのあだ名、知ってます？

さあ。

ロパーヒン 災難磁石―

ドウニヤーシヤ だれがそんなこと？

ドウニヤーシヤ 使用人たちみんな。

「お帰りなさいませ、マダム！」「お帰りなさいませ！」

「マダムのお帰りだ！」「みんな、マダムのお帰りよ！」

(はっとして) お、着いたぞ。

ロパーヒン マダムのお帰りだわ。

どうしよう、鳥肌が立ってきた！

ロパーヒン どうとう帰って来た。

ドウニヤーシヤ ああ、倒ちやいれそう。倒れる… (退場)

ロパーヒン 死んだ親父は小さな店をやっておれたちを食わせた。

酒に酔うとしょっちゅうおれを殴ってた。

十五のころ、

ここの庭でブン殴られたとき奥さまがいてくれた—
リュボーフィ・アンドレエヴナ・ラネフスカヤ…
まだ若かったなあ—

おれの手を引いてこの子ども部屋に連れてきた。

鼻血で汚れたこの顔を洗いながらこう言ったんだ—

「泣かないで、農夫さん。」

なにもかもよくなるわ、あなたが結婚する時代には」

なにもかもよくなる、か…

ああ…おれの親父は農民階級だった。間違いない。

この白いベスト、黄色い靴。

どんなに香水をふりまいたって、豚は豚。

いくら働こうが中身までは変わらない。

難しい本を開けばと勝手に居眠り。

なにが書いてあるのかさっぱりだ。

(人びと、入って来る)

ドウニヤーシヤ みんな、お帰りを待ちこがれていたんですよ。

アーニヤ 汽車に揺られて四日間、

ちっとも眠れやしなかった。

ずっと凍えて過ごして来たの…

ドウニヤーシヤ お嬢さま、ああ、どんなに待ち遠しかったか。

聞いてください、エピソードのこと—

プロポーズされたんです。

アーニヤ なにかと思えばいつもの話…

(髪をときながら) あ…ヘアピン全部なくなってる。

ドウニヤーシヤ あたしを愛してるっていうんです。

どうしたらいいでしょう？

ワーリヤ (登場して) ドウニヤーシヤ―

ドウニヤーシヤ こちらにお泊まりになりましたかたでしょうけれど、
ご遠慮いただいたんです。

ワーリヤ ドウニヤーシヤ、

みんなにコーヒーを入れてちょうだい。

ドウニヤーシヤ はい、ただいま。(退場)

ワーリヤ お帰りなさい、わたしの大事なアーニヤ。

アーニヤ まるで戦場から戻った気分：

ワーリヤ でしょうね。

アーニヤ パリは雪が降ってて、すごく寒かった：

あたしのフランス語は通じないし、もう散々。

：ママはアパルトマンの五階で暮らしてた。

部屋にはフランス人がいっぱいいて：

怪し気な呪文の本を持ってるひと、タバコを吹かすひと―

あたし、ママに近づいて思わず抱きしめたの：

ひとりぼっちにしておけなくて。

ワーリヤ わかった、もういいわ：

アーニヤ コートダジュールの別荘も売っちゃって―

なにも残ってないの、なんにもよ。

なのにママは全然わかってない！

レストランに入ればいちばん高いメニューを頼むの、

あたしだって大金を持ってたわけじゃないのに。

しかもチップを大盤振る舞い。

信じられないのはヤーシヤが同じものを注文するの！

ママの使い走りのくせに！

見たわ、さっき。

ワーリヤ 見かけどおりの嫌なヤツ。(間)

で、どうなった？ ウチは利子を払えた？

まさか。

アーニヤ やっぱり―

ワリーヤ 八月にはなにもかも売られてしまう。

アーニヤ そんなー

ロパーヒン (顔を出してヤギのマネ)

メエエエエ!!!

ワリーヤ もう、どういうつもり…(ロパーヒン、去る)

アーニヤ ワリーヤ。

あのひと、プロポーズした?

(「いいえ」の反応) …

アーニヤ なんで?

(肩をすくめて) …

アーニヤ ロパーヒンさんは、

あなたを好きなんでしょ…だったらー

結婚すればロパーヒンさんが

おカネを助けてくれるんじゃない?

ワリーヤのためにも、ママのためにも。

お互いなにを待ってるわけ?

きつと…

なに?

ワリーヤ きつと…わたしたちにはなにも起きないわ。

わたしは平民の出で養女だもの、

興味の対象じゃないのよ。

みんな、わたしたちが結婚すると思ってるけど…

そんな話、したことないんだから。

夢物語よ…(アーニヤのブローチに気づいて)

ねえ、そのブローチー

とつてもすてきね。

アーニヤ ママが買ってくれたの。

それにあだし、パリで気球に乗った!

気球に!

ほんとよ!

ワリーヤ

アーニヤ…

よかった、無事に帰って来てくれて。

毎日仕事しながら考えてるのはあなたのこと…

どこかのお金持ちと結婚話がないかしらって—

そうなればわたしは安心して修道院に入れる。

モスクワやキエフ、いろんな聖地を巡る旅をしたい。

それがわたしの幸せ—

魂の幸せ…

庭で小鳥たちの声がしてる…いま何時？

ワリーヤ

二時を過ぎたころ。

アーニヤ

おやすみなさい、アーニヤ。(ふたり、退場)

ヤーシヤ

(旅行カバンを持って登場しながら)

よろしいでしょうか？ こちらを通っても？

ドウニヤーシヤ「よろしいでしょうか」って—

あんた、ヤーシヤ？

ヨーロッパでなにがあったの？

ヤーシヤ

どなたでしたっけ？

ドウニヤーシヤ

ドウニヤーシヤ！…フョードル・コゾエードフの娘。

五年前にあんたが旅立ったとき、

あたしの背はまだこんなくらいで…

ヤーシヤ

(ドウニヤーシヤを抱きしめて)

ああ、キュウリちゃん！…(尻に手をあてる)

ドウニヤーシヤ

(思わず声を上げる) キヤーツ！

ワリーヤ

(出て来て) どうしたの？

ドウニヤーシヤ

いえ、なんでも…

ワリーヤ

したくをお願いね！

お母さまにはクリームを！

ドウニヤーシヤ

はい…

ワリーヤ

(近づいて) ロパーヒンさん、

わざわざお出迎えありがとうございます。

夜も遅いのでお開きにしますから、
どうぞお引き取りください。

ロパーヒン
マダムに急ぎの話がありました。

ワーリヤ
え？…

ロパーヒン
競売の件です…

手短かに話しましょう—

ご存じのとおり八月二十二日には、

借金のかたとしてこちらのサンクランボ畑が

競売に出されます…

ワーリヤ
ああ、神さま…

ロパーヒン
そこでわたしが一計を案じました。

土地を手放さずにすむ道があります—

ワーリヤ
え？…

ロパーヒン
サクランボ畑から川沿いの一帯を別荘地にするんです。

サクランボの樹を倒し、貸別荘を建てれば、

収入は少なく見積もって年間二十五億。

ワーリヤ
樹を倒す？

ロパーヒン
ええ、バツサバツサと切り倒します。

エピソードフ
(立ち聞きして)バツサバツサと？

ロパーヒン
そうすればみなさんの問題はめでたく解決です。

ただしこの計画はいますぐ実行しなければ、

秋の収入は見込めません。

サクランボ畑を別荘地に変えること—

それが唯一の方法です。

ワーリヤ
でも、賛成するかどうか…

サクランボ畑はお母さまにとって…

ロパーヒン
もうとつくの昔にサクランボは収穫していません。

放ったらかしの果樹園です。

無用な畑を伐採すればみんなが救われる—

迷う選択じゃないはずだ。

ワーリヤ

たしかにそうかもしれないけど、
樹を切つてしまえばもう二度と…

ロパーヒン

あなたからもマダムを説得してください。

ワーリヤ

ええーでも…

ロパーヒン

では失礼。(退場)

ペーチャ

(登場して) あのー朝まで待てと言われてたんですが、
待ちきれなくて。

ワーリヤ

ダメよ、ペーチャ。

ペーチャ

みなさんお帰りでしょう？

ワーリヤ

どうしてぼくを閉じ込めるんです？

ペーチャ

朝まで待つてと言ったじゃない。

ワーリヤ

だからどうして！

ワーリヤ

あなたに想像できる？

ワーリヤ

お母さまはパリで辛い思いをして帰って来たの。

ワーリヤ

でもここにはもっと悲しい思いがあるの。

ワーリヤ

あなたに会えばそれを思い出すでしょ！

ワーリヤ

あなたはグリーンシャの家庭教師だったんだから！

ワーリヤ

朝まで待てばなにか変わるんですか？

ワーリヤ

どうせ同じことですよ。

ワーリヤ

いいから、ここにいないで。

ワーリヤ

もといた場所にもどってちょうだい。

ワーリヤ

あなたこそ想像すべきです、

ワーリヤ

外の風呂小屋がどんなに寒いか。

ワーリヤ

あんなところにいたら凍え死にします！(退場)

ワーリヤ

なんなのいったい…

ワーリヤ

みすぼらしい格好して…

ワーリヤ

五年も六年も相も変わらず学生やってるなんて…

ワーリヤ

(再び登場して) なにか言いました？

ワーリヤ

相も変わらずじゃありません、

ワーリヤ

眼鏡になったし、頭もハゲましたから！(再び退場)

ワリーヤ

(ヤーシヤを見つけて) ヤーシヤ…

きのうからあなたのお母さまが会いに来てるわ。
ずっと使用人部屋でお待ちよ。

早く顔を見せて来なさい。

ヤーシヤ

ほっときやいいんです。

ワリーヤ

よくもそんな薄情なこと!

ヤーシヤ

おととい来やがれてっんだ。(去ろうとする)

ワリーヤ

ちよつと待って…

あなたのその服、どうしたの?

ヤーシヤ

決まってるでしょ、マダムに買ってもらったんですよ。

ワリーヤ

やっぱり…

ヤーシヤ

時計も…靴も…パリのブティックで。

あなたも欲しいものがあつたら、

買ってもらつたらいいのに。

なんだったら、今度パリに戻ったときに—

ワリーヤ

いいからもう行きなさい!

ヤーシヤ

なんだよ、聞かれたことに答えたのに。(退場)

ワリーヤ

(独りごと) お母さま、相変わらず…

このままだと持つてるおカネを全部使ってしまう—

アーニヤ

(登場して) ワリーヤ…

ワリーヤ

アーニヤ、ごめんなさい、うるさかったわね…

アーニヤ

違うのよ。

眠りたいんだけど、気が立って眠れないの。

このウチがどうなるのか心配で。

もうおカネがないんでしょう?

ワリーヤ

(間) わたしのつまらない愚痴を聞いてくれる?

昔からの使用人部屋があるでしょ、

古いひとたちが寝起きしてる離れの部屋—

あそこにいつのまにか、

どこからか流れて来た人たちが住みついちゃって—

ウチの使用人が入れたのよ。
わたしは黙ってたんだけど、
そのうち妙な噂がたち始めて―

このわたしが使用人たちの食事に豆しか出さないって―
食費をケチってるって。
ひどいと思わない？…

なんだかもうほんと嫌になっちゃって…
(アーニヤを見て) アーニヤ：眠った？…

ごめんなさい、ほんとにつまらない愚痴で。
可愛いアーニヤ…

ベッドへ行きましょ、いらっしやい。
(登場して) アーニヤ…

アーニヤ
ペーチャ
ワーリヤ
シート：眠ってるの、この子。

さあ、行くわよ、わたしの大事な宝物。

アーニヤ
ペーチャ
ぼくの春！
(半分眠ったまま) 疲れた…

夜明けの太陽！

ワーリヤ
行きましょ、アーニヤ。(退場)

♪ 恋をすればひとは 夢のなかへ

(夢のなかの恋人たち)

(銃声)

二幕一場 「かもめ」 2幕より

コースチャ (猟銃とかもめの死骸を抱えて登場) きみ、ひとり？

それとも地面が吸いとったのか？

「難しいことわからない」って、

なにひとつ難しいことなんかない。

ぼくの芝居は失敗した、

きみはぼくを見限り、

つき合う価値のない凡人だと思ってる。

(地べたを踏み鳴らし) クソ！

ろくでもないうぬぼれだった。

(手帳を開きながらやって来るトリゴーリンを指す)

ほら、本物の天才が登場だ。

あの歩きかた、ハムレットかよ。本なんか開いて。

(皮肉で) 「言葉、言葉、言葉…」

太陽の光がまだ届いてもないのに、

きみは微笑み、瞳は溶け始めている。

こんなところにいたらお邪魔だな。(足早に退場)

トリゴーリン

(手帳に書き込みしながら)

かぎタバコ。ウオツカ。いつも黒い服。

学校教員に愛される。

こんにちは、トリゴーリンさん。

やあ。

事情が変わってもうすぐ出発になりそうだ。

たぶん、もう会えない。残念だけど。

せっかく知り合えたっていうのに、

若くて、しかも興味をもてる女性に。

一時間でいい、きみと入れ替われたら。

きみがどんな女性で、どんなことを考えてるのか、

それだけでも知ることができたら…

わたしも入れ替わりたい。

え、なぜ？

ニーナ

トリゴーリン

ニーナ

だって一度くらい有名で才能豊かな作家の気分を味わってみたいわ。いつもみんなに見られてるってどんな感じがするの？
なにも感じないよ、

トリゴーリン

そんなふうに考えたこともない。
(少し考えて) いや、もしかしたら—
きみが思うほどぼくは有名じゃないのかも、
あるいは、有名になるとなにも感じなくなるのかも。
じゃあ、新聞で自分の記事を見つけたときは？

ニーナ

トリゴーリン

褒められればいい気になるし、
けなされれば落ち込む、二、三日。
不思議だわ、世界って。

ニーナ

わたしがどんなに羨ましいと思ってるか、
あなたは想像できないのね。
ひとによって生きる世界がこんなにも違うなんて。
変化も刺激もない生活を引きずってるひともいる。
みんな平凡で、哀れ。
かと思えば、あなたのように一〇〇万人にひとりくらい、
魅力的で眩しい生活を送ってるひともいる。
幸運な人生だわ。

トリゴーリン

ぼくが？ (肩をすくめて)
まあ、きみが言う名声とか、幸運とか、
眩しい生活っていう言葉は、
マーマレードと一緒だ。

ニーナ

甘ったるくてぼくには口にできない。
そんなものより、きみには若さがある、
あなたには素晴らしい生活がある。
素晴らしい？ (時計をみて)
もう書かなきゃ間に合わない。
悪いけど失礼するよ、忙しいんだ— (笑う)

トリゴーリン

あーあ、きみに痛いところをつかれたもんだから、ムキになって、苛ついて―

よしわかった、話そうじゃないか、眩しくて素晴らしいぼくの生活について。

どこから始める？（少し考えて）

そう、ひとは強迫観念にとらわれることがある、たとえば夜に月があがるかどうか心配していると、朝から晩まで月が頭から離れなくなる。

ぼくも多分にその気があって、

一日じゅう原稿を書くことに取り憑かれてる。

書かなくちゃ、書かなくちゃって。

やっとの思いで書き終えたかと思うと、

すでに別の仕事待ち構えてる。

それが終わると三つ目、それが終わると四つ目。

いつも書いている、息つくヒマもない。

どこが素晴らしい？ どこが眩しい？

こんなの奴隷の生活だ。

いまぼくはきみと興奮してしゃべってる、

でも向こうで書きかけの小説が待ってることを

一瞬たりとも忘れてない。

ほら、あそこに雲が浮かんでる、

グラランドピアノみたいな形をしたやつ。

あれを見て、小説に使える！って思うんだ。

グラランドピアノみたいな雲が

すべるように流れていった：

このおしゃべりのあいだも、

ふたりの口をつく言葉を捕まえて、

いつでも使えるように言葉の倉庫にしまいこむ。

仕事が一番落すれば芝居や釣りに逃げ出す。

少し休もう、忘れようと思いきやそうはいかない。

途端に頭が重くなる、新しい小説の筋立てのせいだ。脳内で巨大な鉄の球がゴロツと転がりだし、ぼくをデスクへ引き戻す。書かなくちや。書かなくちや。毎度のことさ。いつだってそう。頭も心も休まることなんかない、生活なんかとつくに放棄してる。いちばん大切な花から花粉を集めておいて、花を荒らし、根こそぎにしてしまう、はるか遠くの知らないだれかに甘い蜜を届けるために狂ってると思わないか。実際、周りの連中は、ぼくをまともな人間として扱ってないんじゃないかな。みんながぼくを欺いてるような気がして怖くなる、そのうち後ろから忍び寄ってきて、ぼくを精神病院に放り込むんじゃないかって。まだ作家になりたてのころ、食べていくのは大変だった。売れていないうちはだれしもそうだ、無名であることを卑屈に思い、自分の居場所がどこにもない。認めてもらえず、気づいてもらえず、神経をピリピリとがらせて、そのくせひとと会えば目をそらしてた。とにかく世のなかが怖かった、恐れてたんだ。自分の読者ができてからも、ぼくの猜疑心は変わらなかつた。新作が芝居になるといつもこう思うようにしてた―黒髪の客はぼくの敵、金髪の客はぼくなんかに興味なし。

ニーナ

ぼくにとって現実には、拷問以外のなにものでもない。そうだとしても、でも—
なにかがパツとひらめくことや、面白いものがどんだん形になっていくことがあるでしょ？
そういう瞬間って、なんていうか、感じるでしょ？
この仕事でよかったあつていう幸せを。

トリゴーリン

嫌いなんだ、自分が書くものが。
好きなのはこういう水辺だ。
ここで自然を感じていると、
情熱や欲望が否応なしに湧いて来る。
でも残念ながら、ぼくは風景画家じゃない。
作家である以上、人びとの悩みに寄り添い、
未来や科学や人権やそういうことを
積極的に論じなくちゃならない—そう考えて焦る。
そのうちに生活や科学は先に進んで、
見えないくらい遠くへ消えていく。
ひとり取り残されてぼくはやっとな気がつく。
結局、自分に書けるのは自然の風景しかない、
それ以外のことはすべて嘘、
なにからなまでに偽物だってね。
働きすぎだわ—これまでずっと忙しすぎたから。
自分がどういふ人間か知らずに来たのよ。
たとえばあなたが満足してなくても、
他人から見ればそりゃあ偉大なひとなんだから。
ほんとうに素晴らしいの。
わたしがあなたみたいに偉大な作家だったら、
人生すべてを国民に捧げてもいい。
そうして心のなかでつぶやく—
人びとにとっての幸せは
このわたしに追いつくことだ、

トリゴーリン

みんなはわたしを勝利の馬車に乗せて運んでるって。
勝利の馬車？
じゃあぼくは、ギリシア神話のアガメムノンだ？

(ふたり、微笑む)

ニーナ

もしも作家や女優になれるなら、
家族や友だちに見放されても構わない。
貧乏や絶望にも耐えてみせる。
屋根裏部屋で黒パンかじる生活だって我慢する。
自分に不満を感じたり、
才能を疑うことがあるかもしれないけど。
でも、代わりにはつきり要求するわ、
本物の名声を。
世界じゅうに響き渡る名声を。
(両手で顔を覆って) ああ、めまいがする。
どうしよう！

「ボリス！ ボリス・トリゴーリン！」

トリゴーリン

呼び出しだ。
荷造りしないと。
もっとここにいたいのに。(湖を見渡す)
なんていい眺めなんだ！
見えるでしょ、向こう岸のお屋敷と庭。
ああ。

ニーナ
トリゴーリン

昔は母の土地だった。
わたし、あそこで生まれたの。
この湖のほとりで育ったからなんでも知ってる、
小さな島があるの。

トリゴーリン

いい眺めだ。

(かもめを見て) それは？

ニーナ

かもめーコースチャが撃つたの。

トリゴーリン

きれいな鳥だ。

ああ、離れたくない。

きみがあのひとに頼んだら、

もう少しいるって言うかもしれない。(手帳にメモをとる)

ニーナ

なにを書いているの？

トリゴーリン

大したことじゃない。

思いつきを。(手帳をしまいながら)

短編の題材。

若い女がいるーきみくらいなの。

彼女は幼いころから湖のほとりで暮らしてきた。

かもめのように湖を愛し、

かもめのように気ままで幸せだった。

そこへ男がふらりとやって来て彼女に目をとめる。

そして退屈まぎれに、破滅させてしまう。

このかもめのように。(間)

「ボリス、どこにいるの？」

トリゴーリン

いま行きます！(声のほうへ)

ニーナ

：

トリゴーリン

(ややあって、振り返る)

出発がのびたよ、もう少し。(退場)

ニーナ

(舞台前方へ) これって夢？

二幕二場 「ワーニヤ伯父」 2幕より

(雷鳴)

アーストロフ (登場して) ひとりかい?…

雷で目がさめてね。

ひどい降りだったな…もう何時だろう?

あのひとは?…

だれが知るもんか。

教授夫人に恋わずらいか?

あのひとは親友だ。

え? もう?

「もう」ってどういう意味だ。

アーストロフ 女が男の親友になるまでには手順があるだろう。

友だち、恋人、その先が親友。

ワーニャ くだらない。

アーストロフ そう、ぼくもいよいよくだらん連中の仲間入りだ。

このとおり酔っぱらっては深酒をして、

最後にはどうしようもない鉄面皮になる。

世のなかが無価値なものに見えてきた。

難しい手術も見事にやってのけ、

未来の計画をぶち上げてみたりもする。

そのうち自分はただの変わり者じゃない、

人類に偉大な貢献を果たす人物かもしれない、

なんて思いはじめてね…

そうなったらもう堂々たる哲学者、

きみたちはみんな虫けらか微生物だ。

ダメだ…もう一杯やらなきゃ。

行こう—あっちにはまだ酒があつたはずだ。

夜が明けたらすぐ帰るよ。

(ソーニャ、登場。アーストロフ、退場)

ソーニャ

ワーニャ伯父さん、またふたりで飲んだのね。どうしちやったの？ 大人なのにおかしい。

ワーニャ

歳は関係ない。自分らしい生きかたができなけりや、幻に生きるほかないじゃないか。なにもないよりましだからね。

ソーニャ

伯父さんは幻を追いかけのに忙しくて、ウチの仕事を投げだしてしまったのね。毎日雨ばかりで庭の草が腐りかけてる。

ワーニャ

(驚いて) 伯父さん、泣いてるの！ 泣くわけがない！ なんでもない、いまのおまえの目つきが、おまえの母親にそっくりだったからさ。

ソーニャ：(手や顔にキスをする) ああ妹：

おまえはどこにいったんだ？

わかってくれたらなあ！

おまえがわかってくれたら！

なにを？ なにをわかればいいの？

つらいんだよ、苦しいんだ。

いや、なんでもない：なんでもない。

さてと、行こう：(退場)

ソーニャ

アーストロフ先生！
起きてらっしゃる？

アーストロフ

ソーニャ

(登場して) どうしました？
お願いですから伯父には飲ませないで。
あのひとはお酒は毒なんです。
どうしてもお好きならひとりで飲んでください。

アーストロフ

わかりました：もう一緒には飲みません。（間）
わたしはいますぐ帰ります。
もう明るくなるでしょう。

ソーニャ

そんなこと言ってません。
雨も降ってるし—
朝までお待ちになってください。
なにかちよつと召しあがりませんか？
あたし、夜なかに食べるのが大好き。
探すときとなにかあるんです。
チーズはいかが？

アーストロフ

あなたの父上は気難しい。
伯父さんは鬱ぎの虫にとりつかれてる。
ぼくだったらここにはひと月といられないな。
人間は美しくあるべきです、
顔も、衣裳も、心も、考えも。
エレーナさんはたしかに美人だけれど：
食べて、寝て、散歩をして、
きれいな顔でみんなを魅了する—それだけだ。

ソーニャ

アーストロフ

：
少し言いすぎましたね。
わたしもワーニャ伯父さんと同じく不満なんですよ、
自分の人生に。
愚痴はそのせいです。

ソーニャ

アーストロフ

ほんとにご不満？ 人生に？
この田舎暮らしは我慢がなりません。
心から軽蔑しています。
わたしはこの土地でだれよりも働いている—
なのに行く先には光が見えない。
もうなにひとつ期待もしていないし、
人間を愛そうとも思わない、だれひとりとして。

ソーニヤ
アーストロフ

だれひとりとして？
ええ、愛しはしません。

ごくまれに話のできる人間と知り合っても、
料簡が狭いか、感覚が鈍いかどちらかだ。

わたしが森が好きと言えば妙なヤツ、
肉を食べないと言えば変わり者―

他人やものごとに対して、

純粹に、自由に接しようとする態度がない。

まるでない！（飲もうとする）

（さえぎって）お願い、もう飲まないで。

なぜです。

似合わないから！

あなたは上品で優しい声をしています、

わたしの知るだれよりも立派です。

なのにどうして飲んだくれたり、

凡人のまねをしようとするの？

あなたは言ったわ―

人間はなにひとつ創り出そうとしないで、

天から与えられたものを壊してばかりいるって。

自分を台無しにはいけないわ。

ね、お願いだから。

（片手を差出して）わかりました、もう飲みません。

約束してください？

約束します。

（手を握って）ありがとう！

やっと迷いがさめました。

ほら、このとおり、もう正気だ。

死ぬ日までこれで押し通します。

（間）ねえ、アーストロフ先生：

仮にもしわたしに姉か妹がいて、

その人があなたを想っているとしたら—
それがわかったらあなたはどうします？
（肩をすくめて）わかりません。
まあ、どうもしないでしょう。

それはそうと、もう帰る時間です。（握手）
送らないで、そっと帰りますから。

ワーニャ伯父さんにつかまらないように。（退場）

ソーニャ

（ひとりで）なにも言ってくれなかった…

なのにどうしてこんなに嬉しいんだろう？

（幸福そうに笑う）わたしはあのひとに言えた—

あなたは上品で優しい声をしていますって。

もしかしたらふしだらに思われたかしら？

まだあたしのなかであのひとの声がする…

この空気のなかにただよってる。

でも、姉か妹がいたらって話をしたら、

あのひとは急に変わってしまった。

（両手をもみながら）ああ嫌だ嫌だ、

どうしてもつと美人に生まれなかつたんだろう！

ほんとにイヤ！

みんなあたしにこう言うわ、

あなたほど親切で心のきれいな子はいないって。

でもそれはこういうことよ—

残念ながら、ソーニャはブスだって！

エレーナ

（登場して）雨があがったみたい。

アーストロフ先生はどこ？

お帰りになったわ。

ねえ、ソーニャ。

なに？

ソーニャ

エレーナ

ソーニャ

エレーナ

いつまでそんな顔をしてるつもり？
どうして敵同士にならなきゃいけないの？
もうやめにしない？

誓って言うけど、あなたのお父さまと結婚したのは、
好きだったからよ。

有名な人だから夢中になったのはたしかだけど、
それは最初だけ。

ソーニャ

それだけじゃ結婚なんて考えない—
ねえ、ほんとうのことを聞かせて…

エレーナ

しあわせなの？
いいえ。

ソーニャ

やっぱり。

エレーナ

じゃあ、お父さまがもっと若かったらと思う？
思うわ。(笑う)

子どもみたいな質問ね。

さあ、なんでも聞いてちょうだい。

ソーニャ
エレーナ

アーストロフ先生って、すてきよね？
ええ、とても。

(笑う) あたしいま、ぼうつとしてるでしょ？
まだ、あのひとの声や足音が聞こえるの。

真っ暗な窓の外にあのひとの顔が浮んで見える。

バカなことを言ってるでしょ？

そう思ってるでしょ？

でもあのひとのこと話したいの、話しましよ—

エレーナ
ソーニャ

ソーニャ…
アーストロフ先生は頭がいいわ。

なんでも知ってるし、なんでもできる。

病人を治したり、森を植えたり…

エレーナ

そうね—

そんなひと、滅多にいないわ—

生活だって大変でしょうに。

お酒を飲まずにいられないのも当然だわ。

(キスをして) あたしはあなたの幸福を祈ってる。

あなたには幸せになる資格があるわ。

(立ちあがる) あたしときたらどこから見ても退屈で、

自分というものがいない人間よ。

音楽をしても、結婚しても、ヘンな噂が立つときも――

いつもだれかの添え物でしかない。

正直に言うけど、

あたしほど不幸な女はいないと思ってる！

(興奮して歩き回る) あたしには似合わないの、幸せが…

ええ、そう、この世にあたしの幸せはないんだわ！

どうして笑うの？

(顔を隠しながら) あたしは幸せよ…あたしは幸せ！

ああ、ピアノが弾きたくなった。

なにか弾いてみようかしら。

ええ、弾いて。(抱きしめる)

今夜はもう眠れない、なにか弾いて！

いいわ。でもお父さまに聞いてみて。

ピアノの音にしても構わないと言ったら弾くから。

ええ、聞いて来る。(退場)

…ずいぶん長いこと弾かなかったわ。

思う存分弾いてみよう。

そうだわ、思う存分――

(間) ママ…

ピアノはやめてくれて！

：

二幕三場 「三人姉妹」 2幕より

ナターシヤ アンドレー、なにしてる？ 読書？

ロウソクの火は大丈夫？

アンドレー (登場して) どうかしたの、ナターシヤ？

ナターシヤ 謝肉祭だからって点けた火を、

ゆうべも使用人が消し忘れてたから。

いま何時かしら？

アンドレー 八時十五分。

ナターシヤ オーリガもイリーナもまだ仕事から帰ってないの。

八時十五分ね。

あたし、ちょっと心配なの、ボービクのこと…

あの子の体が冷たいのよ。

大丈夫だよ、あの子は健康そのものだ。

ナターシヤ 十一時には仮装踊りが来るっていうじゃない？—

断っちゃっていいわよね、アンドレー？

アンドレー それはどうか？

オーリガたちが呼んでるから。

あたしから言っておく、仲良しだから。

(行きかけて) そうだ、あなたのお夕食、

ヨーグルトにしたわ。

本気で痩せたいならヨーグルトだけになさいって、

お医者さまが—

(立ち止まって) ボービクの体が冷たいのって、

部屋が寒すぎるせいだと思うの。

別の部屋に移れないかしら？—イリーナの部屋とか。

あそこなら一日じゅう陽が当たるし、

ちょうどいいのよねえ。

あなたからイリーナに言ってくれない？

当分のあいだオーリガの部屋を

いっしょに使ってほしって。

どうせ昼間はいないんだし、いいでしょ？

：

なんで黙るの？

ごめん、ほかのことを考えてた。

なにも言うことないし：

たのんだわよ。(退場)

アンドレー
ナターシャ
アンドレー
ナターシャ

アンドレー

(古いノートを開いて)

人生なんて、人をバカにしたものはないな。

この古いノート、学生時代の講義録。

笑ったね、なにが大学教授を目指してるだ。

いまじゃ田舎の市議会書記官。

望みうる最高の出世は市議員―

このぼくが市議員どまりか！

市議会議長は悪名高いプロトポフ！

モスクワ大学の教授はどうなった？

学者の夢はどうなった？

二〇カ月前の予定じゃいまごろぼくは、

モスクワの有名ホテルのバーに腰掛けて、

一杯やっつてるころだ。

(ノートを見て) 人生の夢か―

バカバカしい！

ああ、いやになる！(退場)

マーシャ

(マーシャと登場して)

でもあたしが言ってるのはとても単純なこと。

この町で尊敬に値するのは軍人だわ。

少し喉が渴いたな。

ヴェルシーニン

お茶でもあるとありがたいんですが。

マーシヤ

もうすぐ出るわ、少しお待ちになって…
十八で結婚したとき、主人が怖かった。
あたしは高校を出たばかりで、向こうは教師。
なんでも知ってるひとだと思って—

ヴェルシーニン

残念ながらいまはそう思っていないけど。
まあ、そういうものかもしれない。

マーシヤ

主人の話はやめましょう。

ただ、民間人には

がさつで礼儀知らずなひとが多すぎます。

ヴェルシーニン

かもしれないが、

思うに、民間人も軍人も大差ありません。

やれ妻にはうんざりだとか、

子どものことにはうんざりだとか。

低俗なのはいつしょですよ。

マーシヤ

どうしてそんなことになるのかしら…

ヴェルシーニン

けさも妻はひどかった。

熱を出した娘より大声でわめきちらして。

すべて芝居なんです、わたしを困らせるための—

どういうわけかあなたには愚痴をこぼせる。

(手にキス) 怒らないで。あなただけです。

わたしにはあなたしかいない… (間)

マーシヤ

暖炉が騒がしいわ…

父が亡くなる直前にも、

煙突のなかで風がごうごうとうなっていました。

いまみたいに。

ヴェルシーニン

愛しています。

あなたを愛しています。

夢にまで見るようになりました、

マーシヤ

(静かに笑って) そんなこと聞くと、

どうしてでしょう、笑ってしまう。

ほんと怖いのーだからもう言わないで。

(小声で)でも…言って…もう同じことだもの。

(両手で顔を覆って)もう同じこと。

だれか来る。ほかの話をして―

イリーナ

(トウーゼンバツハと登場して) ああ、疲れた!

トウーゼンバツハ

これからも毎晩電報局に迎えに行きますよ、

一〇年も二〇年も。

あなたに追い返されない限り。

(マーシヤたちに気づいて) あ、どうも…

こんばんは。

イリーナ

ちよっと休ませて。疲れちゃった…(横になる)

トウーゼンバツハ

仕事から帰ったきみは、

貧しい国の恵まれない子どもみたいだ…

イリーナ

わたし、いまの仕事が嫌い。大嫌い。

ほかの仕事を探さなきゃ。

電報局はわたしに向いてない。

あこがれも夢見ていたものもなんにもなかった。

ヴェルシーニン

よし、じゃあ、お茶が出るまでのあいだ、

哲学でもしますか?

トウーゼンバツハ

いいですよ、なにについて?

ヴェルシーニン

われわれが消え去ったあとの、

二百年後、三百年後の世界について。

トウーゼンバツハ

未来の生活はある面では打って変わって、

だれもが空を飛び回ってるでしょう。

ファクションは大胆に変化してるかもしれない。

しかしある面ではなにも変わらず、

「人生は辛い」とため息をついて一生を過ごす。

そして死を恐れる気持ちは変わらない。

ヴェルシーニン

わたしには、すべてが未来に向かって、

少しずつ変化していくように思える。

いや、もしかしたらすでに変わり始めているかもしれない。

二百年後、三百年後の未来には

新しい幸せが必ずやってくる。

(笑っている) ははは：

マーシヤ
トウーゼンバツハ

どうかしましたか？

マーシヤ

なんでもないわ、あたしきょうは笑ってばかりなの。

ヴェルシーニン

幸せははるか先の子孫たちが手にするものだ。

幸せになるのはわたしじゃない。

わたしの子孫たちだ。

トウーゼンバツハ

じゃあ、もしもいま、

ぼくが幸せだとしたら？

それはどういうことになるでしょう？

ヴェルシーニン

だれひとり幸せじゃない。

トウーゼンバツハ

(両手を上げて打ち鳴らし、笑いながら)

これは困った、どうすればあなたを説得できるんだ？

(笑うマーシヤに) どうぞ笑って！

(ヴェルシーニンに) たとえ百万年経ったって、

生きかたというものは変わりませんよ。

普遍の法則があって、

宇宙がそれに従って存在している以上、

変わりようがない。

たとえば、秋になると、

渡り鳥はひたすら南へ渡って行く。

その一羽の頭のなかに、

とてつもない思想がひらめいたとしても、

渡り鳥は飛び続けるでしょう。

仮にその一羽が偉大な哲学者になったとしても、

ほかの鳥たちは南へ渡るのを止めはしません。

「勝手に哲学すればいい、おれたちは渡り鳥だ！

ただ飛んで行くんだ！」てね。

マーシヤ　でも、なにか意味があるはずよ。

トウーゼンバツハ　意味ですって？

ほら、いま雪が降ってる。

そのことにどんな意味がありますか？

マーシヤ　渡り鳥はどうして渡るのか、

なにも意味がないことかしら？

自分はどうして生きているのか、

その意味を知らないままだとしたら、

無意味に生きるのと同じだわ。

風に舞う埃と同じ、

人の一生がどうでもいいものになってしまう。

残念ながら…青春は過ぎ去ってしまった。

マーシヤ　お芝居の台詞にこういうのがあるわ、

「諸君、人間の一生とは退屈である」

トウーゼンバツハ　ぼくならこう言いますね、

「諸君、きみたちの議論は退屈である」

(マーシヤに) 決めたんです。

ぼくは軍隊を辞めました。

マーシヤ　ええ、聞いたわ。

もったいない。

トウーゼンバツハ　ぼくは軍人には向いていません。

これからは働きます、精一杯働いてみたい。

夕方家に帰ると疲れ切って、

そのままベッドで寝入ってしまうほど。

働いてるひとはぐっすり眠れるんでしょうね。

(女中がお茶を運んで来ながら、

ヴェルシーニンに手紙を届ける)

ヴェルシーニン

わたしに？（手紙を受け取る）

（マーシヤに）申し訳ない、帰ります。

また大芝居が始まった：

マーシヤ

なにがあったの？

ヴェルシーニン

妻が毒を飲みました。

まったくいつまでこんなことが続くのか：

（マーシヤの手にキス）マーシヤ：

あなたは大事なひとだ：（退場）

マーシヤ

（移動して）わたしにも座らせて。

トウーゼンバツハ

中隊長はどこへ？

マーシヤ

奥さんが毒を飲んだんですって！

いっそ助からなければいいんだわ。

トウーゼンバツハ

（イリーナに）仮装踊りは何時に来るんです？

イリーナ

（冷たく）知らないわ。

きつと九時ごろでしょ？

トウーゼンバツハ

さあ、アンドレー、飲もうじゃないか。

これからはきみをアンドリューシヤと呼ぼう。

ぼくのはニコラーシヤと呼んでくれ。（笑う）

（人びと、入って来ながら、

「こんばんは！」「仮装踊りの人たちは？」

「まだ来てないかな？」「間に合った！」）

トウーゼンバツハ

今夜は飲めや歌えやだ、ともに騒ごう！

音楽だ、音楽！

M「マーシヤの口笛」

マーシヤ

男爵さまが酔っぱらった！

男爵さまが酔っぱらった！

トウゼンバツハ いいぞ、いいぞ！

仮装踊りもすぐに来る！

アンドレー 来ないよ！

ウチの子の具合が悪いんだ。

だから：仮装踊りは：断った。

いや、じつは、ぼくはよく知らない：

でも来ないよ：

どうだっていいだろ！

一同

マーシヤ

ウチに仮装踊りが来ないなら、
外に出て騒げばいいじゃない。

行きましょう。

（イリーナを残し、一同、退場）

ナターシヤ

（登場して）イリーナ、お願いがあるの：

いまのボービクの部屋なんだけど、

じめじめして健康によくないのよ。

あなたの部屋、陽当たりもいいじゃない？

しばらくオーリガの部屋に移ってもらえないかしら？

イリーナ

ねえ、ちよつとなに言ってるの？

どこに移れって？

ナターシヤ

オーリガといっしょの部屋でもいいでしょ？

赤ちゃんって、ほんとに可愛いの。

きょうなんかね、

「ボービク、ママですよ！」ってあやしたら、

ちっちゃな目であたしを見て笑うんだから。

じゃあよろしくね。

あたしこれから出かけてくるから、ほんの二、三〇分。

お誘いを受けちゃって：（退場）

(オーリガ、フョードル登場)

フョードル

あれ？ なにもない…

今夜はパーティーじゃなかったのかな？

マーシャはどこへ行ったのかな？

外で県議会のプロトポフが待ってたようだけど、
なんの用事だろう？

だれに会いに来たのかな？

イリーナ

そんなに質問ばかりしないで！

わたし、疲れてるんだから！

フョードル

なんだよ、ずいぶんご機嫌悪いなあ。

オーリガ

わたしもよかった。

校長が病気になったおかげで代理の仕事が山ほど。

もう頭痛が止まらなくて。

(座って) ゆうべアンドレーが

ギャンブルで借金を作ったんですって—二百万。

町じゅう噂で持ちきりよ。

イリーナ

わたしも聞いたわ…

フョードル

ぼくも会議でぐったりだ。

明日、明後日はのんびりしよう。

(イリーナにキス) おやすみ、イリーナ。

今夜はみんなと一夜を過ごすつもりだったのに。

「ああ、夢のはかなきことよ！」(退場)

オーリガ

頭がずきずきする…

アンドレーがギャンブルで借金…

しかも町じゅうの噂になってる…

もうベッドに行くわね…

あしたは休み。あさっても。仕事がなくて助かるわ。

この頭痛を治さなくちや…(去る)

イリーナ

(横になったまま) ひとりになったわ…

ひとりぼっちに…

モスクワへ行かなきゃ…

モスクワへ…

モスクワへ!

二幕四場 「桜の園」 2幕より

エピソードフ (弾き語り)

♪この世に背を向け 友を捨て

ああ、マンドリンはいいなあ。

ドウニヤーシヤ (化粧を直しながら) マンドリンじゃない、それはギター。

エピソードフ 恋に狂った男には、これはマンドリン―

♪この恋あなたに 届くなら

(ヤーシヤが一緒に歌う)

ドウニヤーシヤ (ヤーシヤに) それにしてもうらやましい、

外国暮らしなんて。

ヤーシヤ まあ、それなりに…(あくびをして葉巻に火をつける)

エピソードフ 外国はどんどん先に進みました。

でも、いまはどん詰まり。

ヤーシヤ まあ、そうとも言える。

エピソードフ こう見えてぼくはインテリなんです。

そのぼくにも理解できない問題がある―

人はなぜ生きるのか? これは難問だ。

生きながらうべきか、それとも自ら死すべきか―

だからぼくはいつだって、

リボルバーを肌身離さず持ち歩いている。

(短銃を取り出して) このとおり。

ふたり

！…

エピホードフ あ…きみに話したいことが―

ドウニヤーシャ どうぞ。

エピホードフ ふたりきりで。

ドウニヤーシャ (ため息) いいわよ。いいけど、でも、

あたしのスカーフとって来てくれない？

ドアのそばに置いてきちやった。

エピホードフ 承知しました。とって来ましょう。

とって来ますとも…いますぐに。

リボルバーの使い道がわかった… (退場)

ヤーシャ 災難磁石―

ドウニヤーシャ あのピストルで自殺なんかされたらどうしよう…

あたし、小さいころはなにも考えてなかった。

でもいまはいろいろ不安だし、いろいろ心配。

ヤーシャ、もしもあたしをだましたら―

どうなっても知らないからね。

ヤーシャ 可愛いこと言うじゃないか―

でも、可愛い子にはへんな噂が立っちゃまずい。

気をつけるよ。

ドウニヤーシャ あんたのことが好きでおかしくなりそう。

頭が良くて、外国帰り…

ヤーシャ おれに言わせりゃ―

恋に落ちた女は豚とおんなじ。

(ふたり、キス) おまえ、上手いな。

(ドウニヤーシャ、ヤーシャに抱きつく) だれか来る…

(ドウニヤーシャ、離れまいとしがみつく) 離れろ！

ふたりでいたと思われないようにしろ。

ドウニヤーシャ (咳込んで) 葉巻のせいで…頭がくらくらする… (退場)

ロパーヒン

(登場して) われらのさまよえる大学生は、
女性の研究に熱心なようだね？

ペーチャ

なにを言うんだ、ほっといてくれたまえ。

ロパーヒン

じゃあ、真剣に質問だ。

さまよえる大学生から見ても

おれみたいなの人間をどう思いますかね？

ペーチャ

(態度を変えて) ロパーヒンさん？ あなたは財産家だ。

そのうち大富豪になるかもしれない。

いまのあなたはたまたま食う者として存在しているが、

しかし…

ロパーヒン

しかし？

ペーチャ

いつか食われる存在になりますよ。

ワリーヤ

ペーチャ…

宇宙の話をしてくれない？

アーニヤ

いいえ、それよりきのうの続き。

ペーチャ

なんでしたっけ？

アーニヤ

人間の誇りとは—

ペーチャ

大した話はしなかったような気がするけど…

そう…人間の誇りという表現そのものに、

象徴的なものを感じるんです。

人間というものを直視すれば、

知性が乏しく自己満足に陥りやすく、

低俗だったり、不幸だったりするものです。

「誇り」を口にすることに意味はない。

人間がその一生においてすべきこと—

それは唯一、労働です、働くことです。

ワリーヤ

人間はいつか死んでいくわ。

一生働いて死んでしまう、それでいいのかしら？

ペーチャ

じゃあ、死ぬとはどういうことでしょう？

人間が死ぬとき、

五つの感覚が消滅されると言われています。

ですが、もしかすると人間には一〇〇もの感覚があつて、残りの九十五の感覚は生き続けるかもしれませぬ。

それはすてきな考えね。

アーニヤ

ロパーヒン

(皮肉で) 気絶するかと思つたよ、最高だ。

ペーチャ

人間は前進します。

いまある能力を完璧なものに改善しながら、

不可能だったことをどんどん現実にしていきます。

しかしそのためには、働かなくてははいけません。

だいたいこの国のインテリはなにもしないでしょ？

怠惰で、読書もしない、科学への関心はうわべだけ、

芸術のことなんかろくにわかっちゃいない。

そんなインテリがおしゃべりで時間をつぶしてるあいだ、

労働者は粗末な食事や窮屈な部屋に耐えている。

これ以上、役に立たない会話はいりませぬ。

黙つてるほうがましなんです。

ロパーヒン

おれは金をやりとりするのが商売だが―

この仕事、人間がどういう生き物かよくわかる。

まともなヤツがいかに少ないか。

たまに寝付けないことがあつて、

そんなときに考えるんだ―

神さまは、われらに広大な森や、平原や、

果てしない地平線をお与えになつた：

ならばそこに生きる人間は、

巨人であるべきじゃないのかつてね。

巨人はおとぎ話のなかだけにしてもらいたいわ。

ほんとうにいたりしたら：

ワリーヤ

(突然、弦が切れたような不気味な音)

ワーリヤ
ロパーヒン

いまのはなんの音？
さあ…

アーニヤ
ペーチャ

どこか遠くの鉾山でワイヤーがちぎれたんじゃ？—
鳥じゃなかった？—カササギとか
あれはぼくのギターの音だ—

アーニヤ
ペーチャ
ワーリヤ

じゃあきつとエピホードフが—(笑う)
あいつ、勝手に…
薄気味悪い—ウチに入りましょう。(アーニヤと退場)

「あのとときも不気味な音がした」
「かもめを撃った銃の音」

「十二時を告げる柱時計」

「父が亡くなる直前にも

煙突のなかで風がごうごうと鳴っていました。
いまみたいに」

アーニヤ
ペーチャ

(戻って) やつとふたりになれた。

ワーリヤはぼくたちが接近しすぎないように
このところずっと監視してる。

なにを心配してるんだか、くだらない—
ふたりの関係は恋愛なんてものを超越してるってこと、
ワーリヤの感性じゃあ理解できないんだろなあ。
ぼくたちが生きる目的ははっきりしてるからね—
自由な人生を邪魔する愚かさを
徹底的に排除すること。

きみとぼくは、はるか彼方に輝く星を目指して歩んでる。
前進あるのみだ。

アーニヤ

ペーチャってほんと、話がじょうず…
あたしも考えが変わったみたい…

ペーチャ

地球上にこれ以上すてきな庭はないと思って、
このサクランボ畑を愛してたのに—
でもいまはなんだかちよつと違う。
昔と同じようには愛してないっていうか。
これからは世界じゅうがぼくたちの庭だ。
世界は広い、なんだからである。

M「ペーチャ・ソング」

♪ 錆びたカギは投げ捨てればいい！

迫る足音聞こえるか？

手放すことおそれなくていい！

ドアはいま開かれた！

自由を運ぶ風が吹き

風はやがて嵐となる！

♪ 荒れ狂う夜空に かがやく満月

想い描くことが 現実になる！

♪ 冷えた時代焼き尽くせ！

きらめく瞳燃え立たせ！

♪ 抜け出せない闇はない！

過去は滅びゆく！ そうだ！！

孤独と手を切るときはいま

肩をならべ声を上げろ！

アーニヤ

いま暮らしてるお屋敷はね、
ずいぶん前から他人のものよ。

だからあたしは出て行ける—誓うわ。

♪ 青白い夜明けを 切り裂く稲妻

望んだ世界が 現実になる！

♪ 鉄の鎖ひきちぎれ！

古いドレスを脱ぎ捨てろ！

♪ Chekhov is great, but…

(「かもめ」のコースチャ、

銃を自分の頭部へ向ける。銃声)

♪ Ah---

三幕一場 「かもめ」 3幕より

(マリア、登場。続いてトリゴーリン)

M「白いかもめと黒いかもめ」

マリア

♪ 忘れなくちゃ 断ち切らなくちゃ

この恋は 報われないから

こんなこと話すの、あなたが作家だからですよ。
使ってもらえたらと思っ

本気で考えたんです、

コースチャが命を落としていたら、
あたしもすぐにあとを追ってました。

でも、勇気を出して根こそぎ断ち切ったんです、
胸の奥からこの恋を。

トリゴーリン

どうやって？

マリア

結婚することになりました。

サイモンと。

トリゴーリン

あの家族の多い学校の先生と？

マリア

ええ。

トリゴーリン

望んでもない結婚を？

マリア

無駄な恋をして、ただ待ってるだけなんて…

でも結婚してしまえば、
新しい苦勞が古い悩みをかき消してくれます。

トリゴーリン

もう一杯いかが？

マリア

それもやめておいたほうが。
平気。(それぞれのグラスに注ぐ)

そんな目で見ないで、女は飲めるのよ、

あなたが思ってるよりずうっと。
あたしみたいに隠さないのはめずらしいけど、
みんなこそそやってるわ。

お決まりはウォッカかブランデー。

(グラスをカチンと合わせて) 乾杯! お元気で。

上品なかた。もう会えないなんて。(ふたり、飲み干す)

トリゴーリン

マリア

大女優さんに頼んでみたらいいのに—
もう少しここにいたいって。

トリゴーリン

彼女はこれ以上ここにいたいとは言わないでしょう。
あれほど手を焼かせる息子がいるんですから—

自殺騒ぎを起こしたかと思えば、

今度はぼくに決闘を申し込むつもりらしい。

いつもなにかにイライラ、カリカリして。

お説によれば、演劇には新しい形式が必要だと…

新しいものにも古いものにも

それぞれ居場所はあるもんなんですがね。

マリア

おわかりじゃないんですか?

コースチャはあなたに嫉妬してるんです。

あたしにはどうでもいいことだけど。

(ニーナ、離れたところに登場)

マリア

あたしの結婚相手はお人好しで、貧乏で、
あたしにぞっこん惚れ込んでる—

哀れなひとでしょ。(笑う)

ああ、どうかお元気で。

できるなら、あたしをお忘れにならないで。

(トリゴーリンの手を固く握って)

あなたの小説、送ってください?

どうかこんなふうにはと言添えて—
「いったいだれから、なんのために生まれたのか、
知らずに生きるマリアへ」って。
さよなら。(退場)

ニーナ ♪ この夢は 手に入れない

いのち差し出してもいい

ニーナ (握った拳をトリゴーリンに差し出して)

偶数か？ 奇数か？

トリゴーリン 偶数。

ニーナ (ため息) 残念、奇数。

これで決めようと思ったの、女優になるかどうか。

そんなことで決めるつもりはないくせに。

ほんとはだれかの意見がほしくて。

だれかが決めることでもない。

ニーナ (間) きょうお別れしたら、

たぶんもう会えないでしょ。

だからどうかこのペンダントを受け取って。

わたしとの思い出に。

あなたのイニシヤルを彫ってもらったの。

裏には小説のタイトル、『昼と夜』。

トリゴーリン これはいい！…(ペンダントにキス)

最高のプレゼントだ。

たまにはわたしのこと、

思い出してくれるかしら？

トリゴーリン もちろん。

一週間前のあの日のことをね。

きみは淡い色のドレスを着ていて、

ふたりでしゃべった。

ニーナ
ベンチの上には白い鳥。
(思いにふけて) そう、かもめ。(間)

だれか来る、ああ、もうおしゃべりできない。
お願い、出発前に二分だけ、
わたしに時間をください。(退場)

トリゴーリン

：(ペンダントの文字を読む)

『昼と夜』二百二十一ページ、十一行と十二行。
なんのことだ？

この屋敷にぼくの本はあったかな？

「二百二十一ページ…」(退場)

マーシヤ

♪ 黒いかもめ 愛にはぐれる

ニーナ

♪ 白いかもめは 風に舞う

コースチャ

(頭に包帯をして) いつのまにか、
自分の頭を撃ち抜こうとしてた：

ママもニーナもあいつに奪われたと思ったら、
なにがなんだかわからなくなって：

トリゴーリンのどこが立派なんだ？！
ぼくとの決闘に怖じ気づき、

尻尾を巻いて逃げていく臆病者じゃないか！

尊敬なんかできるか！ 吐き気がする！

(自分で包帯をむしり取って)

いまの演劇は、ママやトリゴーリンのような
けがれた連中に乗っ取っとられてるんだ。

あいつらは自分たちがやること以外、
認めず、許さず、押し殺し、握り潰す！

とっとと戻れ、カビ臭い劇場に！

気のすむまで腐った芝居に出ればいい！

クソ！—ぼくにはなにも残ってない。

愛するニーナもなくした、
芝居を書く気力も失った、
希望という希望が奪われた。
ボリス・トリゴリン、

あの顔は二度と見たくない！（退場）

（トリゴリン、自分の本を手に登場）

トリゴリン

百二十一ページ、十一行と十二行。

（読む）『わたしの命でよかったら、

どうぞいつでも奪いにいらして』…

（繰り返し）『わたしの命でよかったら、

どうぞいつでも奪いにいらして』…

マリア

♪ なぜ生まれてきたのか？

黒いかもめはさまよう

愛はどこにあるのか

夜を飛んでいく

ニーナ

♪ 恐れること忘れ

白いかもめは恋する

夢の空を求めて

風に身をまかせ

トリゴリン

ああ、よかった！ もう出発なんだ。

ニーナ

必ず会えると思ってた。

（興奮して）トリゴリンさん、

わたし決めたわ、はつきりと。

後戻りはしないー女優になります。

あしたはもうここにはいない。

父親もなにもかも捨てて行く。

新しい人生をつかむために。
旅に出ます、あなたと同じモスクワへ。
向こうで会いましょう。

トリゴーリン

(見回して) ホテルは

スラヴヤンスキー・バサールに泊まって。
到着したらすぐに連絡を。

もう急がないと—

ニーナ

あと一分。

トリゴーリン

(声をひそめて) なんて愛しい。

よかった、すぐにまた会える！

もう一度この瞳に、やさしい笑顔に。

ダメだ、どんな言葉も足りない。

この可憐さ、けがれのない天使だ。

ニーナ：

(ふたり、長いキス)

人びと

♪ ララララララララ

ラララ ラララララララ

ラララララララララ

ララララララララ

三幕二場 「ワーニヤ伯父」 3幕より

(ワーニヤ、ソーニヤ、エレーナ登場。)

エレーナ

あたしは退屈で死にそう…

いったいなにをしたらいいんだろう。

ソーニャ

(肩をすくめて) 仕事ならいくらでもあるわ。帳簿をつけるとか農夫の子どもに物を教えるとか—いくらでも。

エレーナ

無理よ、できる気がしない。

ソーニャ

やってみれば平気になるから。

(エレーナを抱きしめる) 退屈はからだの毒よ、ママ。(笑いながら) それに退屈って、周りにうつるみたい。

見て、伯父さんは一日じゅうなんにもしないで見たいにママのあとばかり追いかけてる。

あたしだって仕事を怠けて、

ママのところへお話に来てしまうでしょ？

それにあのアーストロフ先生だって、

大事な森も患者もほったらかして、

ここへ来ない日はないくらい。

ママは魔法使いね、きっと。

エレーナ

:

ソーニャ

なにをうつむいてるんだ？

(励まして) ねえ、エレーナ、それだけ美しいんだ、

もっと賢くやればいいじゃないか！

きみには魔性の血が流れてる、

いっそ魔女になればいい！

一生に一度くらい思いきり惚れてみればいい！

みんなが呆気にとられるくらい、

ずぶずぶと深みへはまって！

失礼にもほどがあります！ (去ろうとする)

(引きとめて) 待って、悪かった…

許してくれ。(手にキスして) さあ仲直り。

許しません。

エレーナ

仲直りのしるしに、薔薇の花を持って来る。

ソーニャ

けさきみのために見つけたんだ、秋の薔薇—

ソーニヤ
エレーナ
えも言われぬ、悩ましげな薔薇だ。(退場)
えも言われぬ、悩ましげな薔薇ですって？…
(間) もう九月ねえ。

結局あたしたち、ここで冬を越すんだわ！…

アーストロフ先生は？

ソーニヤ
伯父さまのお部屋―

なにか描いてるみたい。

(間) ふたりになれてちょうどよかった、

相談したいことがあるの。

どんなこと？

エレーナ
ソーニヤ
美人に生まれたかった…

もう六年間もアーストロフ先生に恋してる…

M 「ふしだら」

ソーニヤ
♪ 隠せない あのひとへの恋

この胸に しまいきれない

離れないのよ あの甘い声

昼も夜も

ああ 神さま

どうしたら この想いとどくの

知らなかったわ

恋が悔しいものなんて

もしもかわいければ…

エレーナ
あなたはとてもかわいいわ。

ソーニヤ
：

エレーナ
ほんとよ、ソーニヤ。

ソーニヤ
♪ あのひとに 恋して六年

生まれつき美人だったら
苦しむまえに 打ち明けられた
そうよ そう！

エレーナ いいえ、あなたはほんとうに

きれいな髪をしてる。

ソーニャ ブスにはきまってそう言うのよー

「目がきれい」とか「髪がきれい」とか。

エレーナ ソーニャ…

ソーニャ ♪ ああ 神さま わたしにどうか

勇気与えて

好きな気持ちを 伝える自信をください

ふしだらでしょうか

涙のかわりに

わたしに勇気を

エレーナ (物思わしげに) しかたがないわ…

あたしが聞いてあげる。

遠回しにそっと謎をかけるみたいに。(間)

ね、それでいい？

(うなずいて) …

好きか好きじゃないかー

それくらいのはすぐわかるもの。

心配しないで。なんも勘づかれないように聞くから。

でも、もしもイエスじゃなかったら、

もうここへは来ないようにしてもらいましょう。

(うなずいて) …

そうと決まったら、いますぐ。

エレーナ
ソーニャ

あのひと、あたしに見せたいものがあるって言ったの。
拝見しますと言って来て？

ソーニヤ
エレーナ

(興奮して) あとで全部聞かせてね!

もちろんよ。

ほんとうのことがわかれば落ち着くもの。

あたしにまかせて。

ソーニヤ

じゃあ、言いに行くわ、ママが呼んでるって。

(行きかけて) でもやっぱり、わからないほうが…

そのほうが望みがあるもの…

エレーナ

ソーニヤ?…

ソーニヤ

いいえ、ごめんなさい、なんでもない。(退場)

エレーナ

(ひとりになって) ひとの胸の内を知るって辛いことだわ…

あたしにはソーニヤの気持ちがよくわかる。

やり場のない退屈な毎日、

まわりの人間たちが灰色の蛾のように思えてくる。

羽音のようにくだららないおしゃべり、

食べて、飲んで、寝ることしかない暮らしのなかに、

あんな男性がやってくれば—

闇夜にのぼる明るい月—

見とれてしまうのはあたりまえ。

あたしこそ、あのひとのことを考えると微笑んでしまう。

ワーニヤが言ったわ—

魔性の血がなんとかって…

一度くらい思いきってみろって…

でもあたしにはそんな勇氣はない。

気がとがめるに決まってる。

アーストロフ先生は毎日のようにここへ来る。

そのわけに察しがついてるから、

あの子に申し訳ない。

泣いてあやまりたい…

アーストロフ

(統計グラフをかかえて登場)

いつこれを見てもらえるか、待ち構えてました。

(図面を広げ、指でさしながら) ここを見てください。

五十年前の、この地方のようすです。

濃いグリーン、うすいグリーンは森をあらわしたもので、

総面積の半分を占めています。

赤い網目がついているのは鹿や山羊の棲んでいた場所。

この図面には、植物の分布も示してあります。

下のほうを見てください、これが二十五年前。

森は総面積の三分の一しかありません。

そしてこれが現在の有様です。

グリーンはもう点々とするだけになっています。

鹿もかもめもヤマドリもいなくなってしまうました。

十年か十五年後はどうなることか。

(興ざめな口調で) その顔を察すると、

あまり面白くなさそうですね。

あたし、そういうことがよくわからなくて…

ごめんなさい、じつはあたし、

お聞きしたいことがあるんです。

聞きたいこと？

エレーナ

いえ、ほんとつまらないことなの。

まあ、ここへ座りましょ。(ふたり、腰を下ろす)

じつはある若い女性のこと。

この話がすんだらきれいさっぱり忘れると

約束してくださいませんか？

アーストロフ

ええ、いいですよ。

エレーナ

義理の娘、ソーニヤのこと。

あなたはあの子が好き？

アーストロフ え…まあ…尊敬しています。

エレーナ 女性として好きかどうか？

アーストロフ (ややためらって) いえ…

エレーナ じゃあ、あともう少し—それでおしまい。

あなたはなにも気づいてないの？

アーストロフ 別に…なにも…

エレーナ (相手の手をとって) そうね、その目でわかる、

あなたはなにも心にかけてない。

でもあの子は苦しんでるの。

それを察して、もうここへはいらっしゃらないで。

アーストロフ (立ちあがる) ぼくはもうとっくに卒業してるんです。

そういうことに気を回すゆとりもない…

(肩をすくめる) どこにそんなゆとりが？

冗談じゃない！

エレーナ ごめんなさい—

まるで石の詰まったりリュックを背負ってる気分だわ。

胸がどきどき言ってる。

でも、済んでよかった、この話。

きれいさっぱり忘れましょう、

なにも話さなかったみたい…

さあ、もうお帰りになつて。

アーストロフ 彼女を苦しめているというならそれはもちろん…

ただひとつわからないことがあります。

どうしてあなたがこんなことを？

(相手の目を見つめて指を立てて) あなたはずるい！

なんのこと？

エレーナ (笑いだして) ソーニヤが苦しんでいるとしたって、

どうしてあなたがこんな探りを入れるんです？

(相手の言葉を封じながら)

そんなに驚いた顔をしないでください。

あなたはぼくが毎日ここへ来るわけをご存じでしょう…
だれに会いに来てるのかとつくに気づいてる。

そんな愛らしい顔で逃げ足の速い獣みたいに―

ぼくを睨まないでください。

ぼくは老いぼれた雀です。

エレーナ
なんのことだかわかりません…

アーストロフ
世にも美しいシルバーフォックスが、

獲物を狙って罠を張ってる！

現にぼくはこの一カ月、なにもかも放ったらかして、

あなたの虜だ。

さあ、どうぞ、ものの見事にぼくは捕まった。

(上着を脱ぎながら) どうぞお好きにしてください。

エレーナ
あなた、おかしくなってしまったの！

あたしはあなたが思っているより、

ずっとまともな女です！ (行こうとする)

アーストロフ
(行く手を遮って) いますぐ失礼します。

ここへは二度と来ないと約束しましょう。

その代わり… (エレーナの手をとり、あたりを見回す)

別の場所で会いましょう、どこなら会えますか？

だれか来る前に、早く言って…

(情熱的に) 一度だけキスを…

エレーナ
違うわ、あたしはあなたが思ってるような…

アーストロフ
(先を言わずに) 違います！ (両手に繰返しキス)

エレーナ
やめて… 出て行って… (両手を振り放す)

ひどいひと。

アーストロフ
あした、どこで会いますか？ (エレーナの胸に手を回す)

だってそうでしょう、もうこうなったら否も応もない、

会わずにはいられない。(キス)

(ワーニヤ、薔薇を持って登場。立ちどまる)

エレーナ

(ワーニヤに気づかず) 放して…

(アーストロフの胸に頭を押しつける) いけないわ!

(去ろうとする)

アーストロフ

(手を放さず) あしたの二時、森の小屋で…

いいですね?

エレーナ

(ワーニヤを見て) 放しなさい!

ひどすぎる…

ワーニヤ

(花束を椅子の上に。興奮のあまり顔や首を拭いながら)

どうってことないよ…なに…どうってことない。

アーストロフ

(ふてくされて) やあ、ワーニヤ、いい天気だね、きょうは。朝はひと雨来そうな空だったのに、

秋らしい秋だ…草木も順調に育ってるし。(と凶面を巻く)

だいぶ日は短くなったがね…(退場)

エレーナ

(ワーニヤに近寄って) お願い、力を貸して。

あたしたち夫婦が今すぐここを出て行けるように。

なんとかしてちょうだい!

ワーニヤ

(顔を拭きながら) ええ?…ああ…

見たよ、エレーナ…全部…

エレーナ

(いらだって) なんとかして!

きょう、ここを出て行くんだから!

どうしても!(退場)

ワーニヤ

もうなにもかもおしまいだ!

(花を捨て、リボルバーを取り出し、教授のところへ)

(銃声。エレーナの悲鳴。)

エレーナ、登場して夫をかばう。ソーニヤが逃がす)

エレーナ

(銃をもぎとろうとして) こっちに貸して!

ワーニヤ

貸しなさい！

放してくれ、エレーナ！ 放せ！

(エレーナを振り切り) あんたの夫はどこだ？

教授閣下の話を聞いたぞ！

この土地を売り払うだと？

ここを売ったカネでフィンランドに家を買う？

あんたとふたりで暮らす家を！

なにを寝ごと言ってる！

ソーニヤとぼくはどこへ行けというんだ？

知らない、あたしはなにも知らないの！

知らないなら教えてやる！

そもそもこの土地はソーニヤのものだ。

死んだ親父が妹の嫁入り支度を買った土地だ。

当時のカネで九億。

だが親父は七億しか払えずに死んだから、

残る二億五千万はぼくが稼ぎ出して支払った。

大好きな妹のためを思って相続権も放棄した。

そうしなければこの土地はウチのものになってない。

そして妹が死に、ソーニヤのものになった。

たとえあいつが父親でも、

ソーニヤの承諾がなければ売れやしない！

世間知らずの教授閣下に代わって、

二十五年間、ぼくがこの土地からカネを生んだ。

そのおかげで生活ができたんじゃないのか！

あいつの論文や記事を読みふけては、

ぼくの誇りだなんてー

だが、いまこそ目がさめた！

あいつは芸術のゲの字もわかつちやいない！

あいつの本に値打ちなんかあるもんか！

ぼくはだまされた！ 人生を棒に振った！

ぼくだって男だ、人間だ—
まともに暮らしていれば、
シヨールペンハウエルや

ドストエフスキーになるチャンスだってあったのに！
くそつ、なにをくだらんことを！

ああ、気がちがいきそうだ。ああ…

どうしたらいいか、ちゃんとわかってる！

逃げても無駄だ、そこにいるな！

(教授をめがけて撃つ。銃声)！

ダメか？　しくじったか？　ちくしょう！　(座りこむ)

エレーナ

だれか、あたしをどこかへ連れて行って！

いっそあたしを殺して…

とてもここにはいられない！

ワーニャ

(悲痛な声で) ああ、おれはどうしたんだ！

どうしたんだ！

ソーニャ

だれか！　だれか！

三幕三場 「三人姉妹」 3幕より

M 「トラム・タムタム」

(オーリガとイリーナの部屋)

オーリガ

(手当たりしだい衣服を取り出して) 持って行って…

ジャケットも…セーターも…スカートも…

この先は全焼らしいわ！

かわいそうに、中隊長のお住まいも危なかったのよ…

娘さんたちにお泊りになるように言ってあげて—

遠慮しても返しちゃダメよ。

だれか！ 手が足りない、手伝って！

まだこれからどどん避難して来るんだから、

もつと下に運んでおこなきや…

全部よ、全部：わたしたちはなにもいらぬから。

全部あげてちようだい…

♪ 燃え上がる 窓の景色

奪われてく なにもかも

ナターシヤ

(登場して) ねえ、聞してる？

下の階は逃げて来たひとでごった返してるわ。

これ以上はもう無理。

ボービクもソーフォチカも眠ってるし。

インフルエンザがうつらないか心配…

すぐそこで火事があったなんてウソみたい—

オーリガ

ここはこんなに静かなのに。

ナターシヤ

このウチの使用人、役立たずばかり。

いつまで雇っておくの？

嫌なのよ、あたし—

余計な人間がウチのなかをウロウロしてるのが。

まあ、こわい顔。

ウチの校長先生はお疲れなのね。

ソーフォチカが中学に上がったら、

やさしくしてもらえろといいいけど。

校長にはならないわ。

オーリガ

いいえ、あなたは選ばれる、つぎの選挙で。

ナターシヤ

もしそうになったら辞退するから。

オーリガ

それよりナターシヤ、ウチの使用人に辛くあたらないで。

あたしにはそういうの耐えられないから。

ナターシヤ

でもね、もう働けないばあやがいるわ。

村に帰した方がいいんじゃないかしら？

昼間はあたしが見てるから言うけど、

いつだって寝てるかしやがみ込んでるかどっちかよ。

オーリガ

いいじゃない、

そうしたいからそうしてるんでしょ。

ナターシヤ

なに言ってるの？ あれは使用人でしょ！

あの役立たずがいなきや、

もっと子守りや乳母を雇えるじゃない！

ああ、もう、今晚だけで一〇歳老けた：

ナターシヤ

オーリガ！

あなたが学校で忙しくしてるあいだ、

あたしは家のことを精一杯みてるつもりよ。

役立たずは追い出してちょうだい、今週中に！

いいわね、あたしを怒らせないで！

(我に返って) あなたが下の階に移ってくれないと、

またこんな喧嘩をしそうでぞっとするわ。(退場)

♪ 燃え上がる 窓の景色

奪われてく なにもかも

フョードル

(登場して) マーシヤはいる？

なんとか下火になったみたいだし、帰れそうだ：

街じゅう丸焼けかと思っただよ。

向こうのブロックは全焼したみたいだけど。

オーリガ：きみはなんてやさしいひとなんだ。

もしもマーシヤがいなかったら、

ぼくはきみにプロポーズしたんだろうな。

ああ、それにしてもきょうは驚いた。

(いつのまにか、オーリガ退場。)

イリーナ、トウーゼンバッハ、ヴェルシーニン登場。
トウーゼンバッハは私服)

イリーナ

ひと休みしましょう、

ここはだれも来ないから。

ヴェルシーニン

軍隊の出動でどうにか食い止めた。

―じつに、よくやってくれた。

フョードル

いま何時ですか？

イリーナ

三時をまわったところ。

もうすぐ夜明けね。

ヴェルシーニン

きのう耳にしたんだが、

近く旅団が移動になるらしい。

ポーランドか、あるいはシベリアか。

いずれにしても遠い駐屯地へ。

トウーゼンバッハ

じつはぼくも聞きました。

それがほんとうならこの町は空っぽだ。

イリーナ

あたしたちも出て行くわ、モスクワへ。

(一同、疲れて横になる)

マーシヤ

(片隅に登場して) …

ヴェルシーニン

壁の向こうは火の手が上がり、

目の前にはわけもわからず立ち尽くす子どもたち。

昔、経験した戦場を思い出しました。

(間) まるで世界が眠りに落ちたようだ。

マーシヤ

(アカペラで) トラム・タム・タム・タム・タム・タム・タラタタタタ…

ヴェルシーニン

トラム・タム・タム・タム・タラタタタタ…

マーシヤ

トラ・タム・タム…

ヴェルシーニン

チタ・タラララ・ラム… (笑う)

(ヴェルシーニン、退場)

トウーゼンバツハ (目覚めて) ああ、ほんとに疲れた…

ぼくは引越してレンガ工場に勤めることにしました。

(イリーナ) なんて白くてきれいなんだ。

あなたの白さがこの暗い部屋を明るくしてる。

でもあなた自身は悲しんでいますね。

いまの暮らしに不満だから。

ぼくといっしょに行きましょう、

ここから出ていっしょに働きましょう。

そう、ここから出てって。

マーシヤ

トウーゼンバツハ (笑って) なんだ、そこにいらしたんですか！

(イリーナの手にキス) じゃあ、ぼくはこれで…

いまあなたを見つめながら思い出しました。

三年前のあなたの誕生日、

あなたは明るく労働への憧れを話してました。

あのとき、幸せがぼくに微笑みかけたんです。

(手にキス) 泣かないで。

横になって休むといい…もうすぐ夜が明けます。

もしも許してもらえるなら、

この人生をあなたのために投げ出したい。

ほんとにもう出てってよ！

いつまでもいつまでもいつまでも！

はい、はい、帰ります。(退場)

フョードル、ひとりで帰ってくれる？

どうして？

マーシヤは疲れてるの、休ませてあげて。

じゃあ、帰るよ…

きみはぼくの妻—すばらしい奥さんだ。

愛してるよ。

マーシヤ

愛さない、愛してる、愛す、愛するとき、愛すれば、愛せよ…

フョードル

(笑って) きみにはいつも感心する。

結婚したのは七年前—まるできのうのようだ。

ぼくは満足、満足、満足だ。

マーシヤ

あたしはうんざり、うんざり、うんざりだ！

もうダメ、黙っていられない…

一同

?…

マーシヤ

アンドレーのことだけ—

このウチを銀行の抵当に入れたんですって。

そのおカネは全部あの鬼嫁が持っていた。

ここはあたしたち四人のものよ！

そんなこともわからないなんて、

アンドレーは狂ってる！

きみはその話に首を突っ込まないほうがいい。

アンドレーはどうしようもなかったんだ。

かわいそうに、借金まみれなんだよ。

それにしたって許せない！

「わが財産はこの知恵なり」

いいから早く帰って。

…

アンドレーも落ちぶれた。

大学教授になるはずだったのに、

市会議員になれたって自慢してる…

プロトポーフは市会議長でアンドレーはヒラの議員。

町の人たちはかげで笑ってる、

プロトポーフとナターシヤの関係を噂して…

アンドレーだけがなにも知らずに借金作ってる！

こんなみじめなことってある?!…

(泣き出して) ほんとにもういや、我慢できない!

(オーリガ、登場)

オーリガ

どうしたの?

なんだっていうの?

イリーナ

昔はちゃんとあったものが、

どんだんどこかに行ってしまう、

ああ、神さま：イタリア語も忘れてしまった、

窓や天井をなんて言ったかしら：

毎日少しずつ忘れていく：

どんだん過ぎ去って二度ともたに戻らない。

わかってるわ、モスクワには行けないんですよ?

わたしたちはモスクワには行けないのよ。

オーリガ

イリーナ：

仕事なんかもうたくさん：

働きたくない、働けないわ。

市議会で働いたけど、

わたしの仕事は雑用ばかり：

つぎの誕生日で二十四になるのに、

仕事で得たものなんかにもないし、

満足したことなんか一度もない。

ただ時間だけが過ぎていって、

思い描いた人生から遠ざかっていくのがわかる。

それどころかどん底に落ちてしまったわ。

もう這い上がれない、絶望しかない、

どうしてきょうまで自殺しなかったんだろう：

オーリガ

泣かないで、イリーナ：

あなたの姉として、親友として言わせてもらおうわ。

このアドバイスは真剣に聞いてちょうだい。

あなたは男爵と結婚なさい。

イリーナ
（静かに泣く）：

男爵は汚れない正しい人物だわ。
女にとって結婚は愛のためにするものじゃないの。
義務を果たすためにするもの。

だからわたしだったら、愛はなくても、
清く正しいひとなら結婚する。

よろこんで結婚するわ。

イリーナ
モスクワへ帰れば理想のひとと出会えるはずだから、

そのひとのことを思っただけで恋してた。

オーリガ
（イリーナを抱いて）わかるわ：

でも神さまの思し召しなら、

男爵とあなたの結婚はほんとにうれしい。

結婚は、愛や見た目とは別のことだもの。

マーシヤ
（間）ふたりに聞いて欲しいことがあるの。

ずっと胸が苦しくて：

ふたりに打ち明けたらもうだれにも言わない。

一分で終わるわ、これはあたしの秘密。

どうせわかることだから：

オーリガ
やめて、聞きたくない。

どんなにバカなことを言っても

わたしには聞こえないわよ。

マーシヤ
どうしようもなくあのひとが好きなの：

あのひとあなを愛してくれてる。

運命のひとよ：

恐ろしいことをしゃべってるわね：

許されないことを：

（イリーナの手をとり引き寄せて）でもね、イリーナ：

小説に出てくる恋はどれもありません。

なにがどうなるか、どうすればいいか、

わかりきってるでしょ？…

でも自分がほんとうの恋をすると、

なにもわからなくなつて、

なにも決められなくなるの…

あたしの話はこれでおしまい。

もうだれにも言わない。

黙るわ、沈黙する、ひとことも、なにも…

ふたり

アンドレー

(登場して) 金庫の鍵を貸してくれない？

自分のをなくしたみたいなんだ。

オーリガのところにもあるだろ…

オーリガ

(黙ったまま鍵をとりだす) …

アンドレー

なにも言わないの？

オーリガ

(鍵を渡す) …

アンドレー

なにか言えよ…

(間) そういう態度はないだろう…

マーシヤもいるな…イリーナも…

この際だ、ちようどいい、

ぼくに不満があるなら言ってくれ。

オーリガ

やめましょう、話はあした。

今夜はもうたくさんだから！

アンドレー

ぼくは冷静に聞いている—

不満があるならはっきり言ってくれ。

ヴェルシーニン

(声) トラム・タム・タム

マーシヤ

トラム・タ・タ…

話はあしたよ。(退場)

オーリガ

おやすみなさい。

アンドレー

じゃあ、これだけ言ったら出て行く…

まず第一に、ぼくは妻を愛してる。

だからきみたちにもそれなりに、

妻に敬意を払ってもらいたい。

(間) 第二に、ぼくが市会議員になったことを
きみたちは挫折だと思ってるらしい。

だが市会議員だって高尚な仕事だ、

ぼくは誇りをもってこの身を捧げてる。

誤解しないでほしい。

(間) 第三に、ぼくはきみたちにとわりもなく、

このウチを銀行の抵当に入れた。

それについて心からあやまる。

ただ、それほど追いつめられたんだ。

言っておくけど、もうギャンブルはやめたーかなり前に。

(顔を出して) マーシヤはここにいないかな？

どこへ行ったんだろう？ おかしいな… (退場)

だれもわかってくれないのか？

ナターシヤを愛してたんだ、心からー

結婚すればなにもかもうまくいくと思ってた…

市議会議員だって立派な仕事だ…

どうしようもなかったんだ…

この家を売ったのも…

(泣く) オーリガ、マーシヤ、イリーナ…

M「トラム・タムタム」

♪ 燃え上がる 窓の景色

奪われてく なにもかも

アンドレー

♪ 聞くなよ 信じるな

言い訳 並べただけさ

♪ ぼくの言うことは

なにひとつ信じるな
心の声は言葉にできない

♪ だけど
♪ 昔ぼくは 信じていた
恋が燃えるときに 幸せがくると

ナターシャ

♪ トラム・タム・タム・タム・タラタタタタ

♪ トラム・タム・タム・タム・チタ・タララ・ラム

アンドレ

♪ トラム・タム・タム・タム・タラタタタタ

♪ トラム・タム・タム・タム・チタ・タララ・ラム

(アンドレーとナターシャ、退場)

フョードル

(顔を出して) マーシャはいないね?
こりゃたいへんだ… (退場)

マーシャ

♪ トラム・タム・タム・タム・タラタタタタ

ヴェルシーニン

♪ トラム・タム・タム・タム・チタ・タララ・ラム

イリーナ

♪ いつかは町から みんな消える

わたしは決めたわ あのひとと生きる

トウゼンバツハ

♪ ぼくと?

イリーナ・トウゼンバツハ

♪ あなたはわたしの選んだひと
まだふたりの恋は 芽生えもしない
けれど

イリーナ

♪ 夢あきらめない

旅立つわ 必ず 幸せが待つ

モスクワへ行く

トウーゼンバッハ

♪ 夢見て待つよ

きみの愛 いつしか 幸せが待つ

ふたりの世界

恋人たち

♪ トラム・タム・タム・タム・タラタタタタ

トラム・タム・タム・タム・チタ・タラララ・ラム

トラム・タム・タム・タム・タラタタタタ

トラム・タム・タム・タム・チタ・タラララ・ラム

イリーナ

わたしは男爵と結婚する。

だけどモスクワには行かなくちゃ、

どうしても。

三幕四場 「桜の園」 3幕より

ワリーヤ

きょうは八月二十二日―

とうとう運命の日が来てしまった…

サ克蘭ボ畑が競売にかかっているというのに、

お母さまは屋敷で夜会なんか開いてる―

どういうつもりなんだろう…楽隊まで呼んで！

支払いはどうすればいいの？！

ああ、神さま…

ヤーシヤ

ワリーヤ、あなたからマダムに頼んでもらえませんか？

つぎのパリ行きには、

またおれにお伴させてほしいんですよ。

サクランボ畑がなくなったら、

もうここには暮らせませんよね…

おれはこんな田舎に残るのはご免です。

ここは野蛮で、品がなくて、退屈です—

パリへ戻りたいなあ。

ワリーヤ
自分で言いなさい。

でも、お母さまがパリへ行くとは決まっていなわ。(退場)

ペーチャ
(からかって) マダム・ロパーヒン!

ワリーヤ
うるさいわね、さまよえる大学生!

ペーチャ
ええ、なんどでも! それが誇りです。

ワリーヤ
ひとの気も知らないで!

アーニヤ
競売はどうなったんだろう?

もうとつくに終わってるはずよね?

ワリーヤ
(落ち着かせようとして) 伯父さまが落札したわ。

絶対にそう…

ペーチャ
(皮肉で) さて、はたしてどうでしょう…

ワリーヤ
そうに決まってる。

わたしは信じる、伯父さまはきつと…

ペーチャ
競売が中止にならない限り運命は変わりませんよ。

口には出さないけどみなさんわかってるんです、

サクランボ畑の運命を。

だからだれひとり真剣に守ろうとしなかった。

あなたもだ、ワリーヤ。

マダム・ロパーヒンになっていけばいまごろ…

黙りなさい、若ハゲ!

あなたになにがわかるのよ。

ワリーヤ、

たしかにロパーヒンさんはいいひとだわ。

いまからだって…

ワーリヤ

わかってるの、ほんとうによくわかってる…
彼のことは好きだから：

アーニヤ

だったら早く！
待つてる必要なんてないじゃない！

ワーリヤ

彼、なにも言ってくれないの。
話題はいつもおカネのこと。

わたしにはちっとも興味ないみたいに—
でもそれが本心かも。

もしもいまわたしにおカネがあれば—
なにもかも放り出して遠くに行くわ。

どこか遠くの修道院に。

ペーチャ

ああ、それが「魂の幸せ」？—
怒りんぼうのワーリヤが修道院！

ワーリヤ

学生だったら少しは頭を使ってよ！
ひとの気持ちを考えることに！

ほんとにもう、見た目も中身もみすばらしい！

ヤーシヤ

(登場して) エピホードフのやつ、
ビリヤードのキューを折りやがった。

ワーリヤ

なんでエピホードフがいるの！
ビリヤードをしていいなんて言ってない！

なんなの、ここのひとたちって！ (退場)

ヤーシヤ

(アーニヤに) 厨房でだれかが言っていましたよ、
サクランボ畑が買われたって。

アーニヤ

買われた？ だれに？
さあ、それは聞いてませんねえ。

ペーチャ

踊ろう、アーニヤ： (アーニヤの手をとって)
(化粧を直しながら登場し、ヤーシヤに)

ドウニヤーシヤ

レデイが少ないからダンスに参加しろって。
あたし、ダンスなんかしたら頭クラクラだし、

心臓だつて飛び出そうなんだから…

それにあの郵便局長、あたしになんて言ったと思う？

もう、息が止まりそうになっちゃった。(音楽が止む)

「あなたは花のようですね」って。

ヤーシャ 最悪の社交辞令…

ドウニヤーシャ 「あなたは花のようですね」って。

「あなたは花のようですね」…

(去って行くヤーシャに) ヤーシャ!

エピホードフ (登場して) ドウニヤーシャ—

ドウニヤーシャ なに？

エピホードフ もしかして、もしかして、

きみはぼくを避けてたりするっていうことがあるかな？

ゴキブリから逃げるみたいに—

ドウニヤーシャ なにかご用？

エピホードフ いや、きみは完全に正しい。

たぶんぼくは虫けらなんです。

ただ、ひとつ言わせてもらえば—

きみは約束してくれたはずです…

たとえぼくがこんな—

ドウニヤーシャ その話、あとにしにしてくれない？

エピホードフ はい、しかし—

ドウニヤーシャ あたしはいま夢を見るのに忙しいの。

エピホードフ ええ、災難には馴れています。

大丈夫。にっこり笑っていられます。

(登場して) エピホードフ! まだいたの？

ここでなにしてるの？

ドウニヤーシャ、向こうへ行つてて—

(再びエピホードフに) ビリヤードなんかして

キューを折ったかと思えば、

お客にまぎれて客間をうろついて…

エピソードフ

いや…あの…

釈明の機会をただければ応えます、
しかしあなたの立場でそれができるのかな…

ワリーヤ

釈明なんていららない—

あたしはあなたを叱ってるの。

仕事もしないでうろついているから—

なんのために事務係を雇ってるんだか！

エピソードフ

あなたにとやかく言われる筋合いはありません。

あなたはわたしのなんですか？

あなたにそんな権利はないはずですが…

ワリーヤ

よくもそんなことわたしに言えたわね。

ここから出てって！

エピソードフ

ちよつと…

ワリーヤ

出てって、いますぐ！

さもないと力づくでも放り出すから！

エピソードフ

あの、言い過ぎだったらごめんなさい。

しかし、もっとおだやかな解決の道が…

ワリーヤ

早く！ 出てって！ さあ！

(エピソードフをドアのほうへ追い立てる)

消えてなくなれ！ 災難磁石！

二度とわたしに近づかないで！

エピソードフ

(去り際の声) 言いつけてやるからな！

ワリーヤ

やれるもんならやってみなさい！

なによ…かかって来る気？

こうしてやる！（その瞬間、ロパーヒンが登場）

ロパーヒン

まいった、降参—

ワリーヤ

あら、ごめんなさい—

ロパーヒン

手荒い歓迎、感謝します。

アーニヤ

ロパーヒンさんだわ。

「ロパーヒンさんだ！」「本物のロパーヒンだ！」

ワリーヤ 伯父さまは？

ロパーヒン いっしょです、すぐに来るでしょう。

ワリーヤ それでは？ 競売は？ どうなったの？…

ロパーヒン 教えてちょうだい。

ワリーヤ 競売が終わったのが四時だったんです。

ロパーヒン われわれは列車に乗り損ねて、

ワリーヤ 九時半まで待たされましたー

ロパーヒン ああ、少し頭のなかが回ってるなあ。

ワリーヤ サ克蘭ボ畑は買われてしまったの？

ロパーヒン そうです。

ワリーヤ 買ったのはだれ？

ロパーヒン わたしです。

ワリーヤ わたしが買いました。

（ワリーヤ、ベルトの鍵束を外し、

ロパーヒンの前に投げ捨て、退場）

ロパーヒン

のどが乾いたなーちよっと待ってください。

（間）

（アーニヤに）きょうあなたの伯父上が用意していたのは

一億五〇〇〇。

しかし最初の入札が三億から始まった。

話にならない…

決着したのは九億。

わたしが九億ルーブルを積んで競売は終わりました。

わたしが競り勝った。

サ克蘭ボ畑はわたしのものになりました。

わたしのものです！（高らかに笑う）

夢みたいだ：夢のなかにいるようだ。
いつも殴られ、

ろくに文字も読めなかった奴隷の息子が、
世にも美しいこの領地を買ったんだ。

主人の領地を買ったんだ。

(床から鍵束を拾い上げ、微笑みながら)

マダム・ロパーヒンにはなりませんってことか？

(鍵束を振って鳴らす)

まあ、どうでもいい：

おい、音楽だ。

おれのために音楽を！

ここからおれの子孫たちが、

真新しい生活を始めるんだ。

音楽！

ペーチャ

(アーニヤに) 大丈夫：

こうなることはわかった：

これでいいんだ：

アーニヤ

：

ロパーヒン

なぜだ？

なぜだれもおれの言うことを聞かなかったんだ？

もう取り返しがつかないぞ。

(人びとに) どうしてあなたが泣くんですか？

どうして！

そつとしておいてあげましょうよ。

泣かせてあげなくちゃ。

さあ：向こうへいきましよう：

いや！ ここにいる。

おれは新しい主人だーサクランボ畑の持ち主だ。

ペーチャ

いいから、来るんだ：

ほら、こっちへ…（ふたり、退場）

アーニヤ

（広間の人びとに）サクランボ畑は買われてしまった。もう取り戻せない。

でもね、わたしたちには、

けしておカネじゃ買えない、

きれいで善良な魂があるわ―

ここは手放せる―

新しいサクランボ畑を作るの。

ここよりもっと美しいサクランボ畑。

そうしたら心にまた喜びが湧いてくる。

深くて、静かな喜びが。

夕暮れどきの太陽のような喜びが。

四幕一場 「かもめ」 4幕より

アリア

（声を上げながら）コースチャ！ コースチャ！

サイモン

（耳を澄まして）外はまだ荒れてるな。

マリア

（気づいて）なによ…まだいたの？

サイモン

ウチへ帰ろう、マリア。

マリア

（首を横に振って）今夜もここに泊まる。

サイモン

たのむよ、マリア。

赤ちゃんがお腹空かせて待ってるから。

マリア

平気よ、子守りがいるでしょ。

サイモン

赤ちゃんがかわいそうだ。

ママのいない夜が三日も続いている。

マリア

ほんとうにつまらない人になった…

赤ちゃんが！ 赤ちゃんが！ 赤ちゃんが！

サイモン

ウチへ帰ろう！　ウチへ帰ろう！　そればかり。

マリア

ひとりで帰って。

サイモン

そうしたら、あしたは帰ってくれるかい？

マリア

(嗅ぎタバコをかきながら)　いいわ、あしたね。

ああ、しつこい！

サイモン

じゃあ行くよ。

おやすみ、マリア。(退場)

マリア

余計なお世話！

望みのない恋なんて小説じゃあるまいし。

くだらない！　現実を受けとめなきや。

甘えちゃいけない、期待しちゃいけない。

報われない恋なんて追い出さなくちや。

(姿の見えないコースチャに)

サイモンがほかの郡に転任するの！

この土地を離れば忘れられる！

きれいさっぱりなにもかも！

遠くに行けば、ひと月もしないうちに平気になる。

コースチャが見えないところに行けば大丈夫。

こんなの、くだらないことよ。

サイモン

(再び登場して)　マリア：

マリア

(夫に)　まだいたの？

サイモン

(すまなさそうに)　お母さんに

クルマを出してもらえるようにたのめないかな？

知らないわよ、もう消えて！(退場)

マリア

コースチャ

(登場して)　：

サイモン

それで、見つけたのかい、ニーナを？

コースチャ

いや：

サイモン
でもあれはたしかにニーナだったろ？

コースチャ
：

サイモン
なにがあった？

コースチャ
マリアはいいの？…話すと長くなるよ。

サイモン
できれば、簡潔に。

コースチャ
：ニーナは家出をしたあと、

トリゴーリンと一緒にになった。

そこまでは知ってるね？

ああ。

サイモン
そのあと子どもを産んで…

だけど死なせてしまった。

トリゴーリンはニーナに飽きて、

だれもが思ってたとおりの元のおさまたた

ぼくの母親の愛人に。

そのころニーナの暮らしは

悲惨なことになってると聞いたんだ。

女優の仕事は？

サイモン
コースチャ
モスクワから少し離れた劇場で初舞台に立って、

それからは地方まわり。

ぼくはニーナの舞台を観に行ってた。

彼女はいつも大きな役だったけど…

才能はあったんだろ？

さあ、なんとも言えない。

一度だけ、彼女が泊まってるホテルを

訪ねて行ったことがあるんだ、

でもボーイに追い返された。

彼女の気持ちが変わったから、

それからは無理に会うのはやめた。

ほかになにを話せるかな…

そのあと、ぼくがここへ戻ると、

彼女から手紙が届くようになった、何通も。

明るくて、やさしくて、心のこもった手紙が。

弱音は吐いてないのに、どん底にいるのがわかった。

彼女、手紙のサインを「かもめ」って書いてた。

ニーナは自分を「かもめ」って。

何度も手紙のなかで繰り返してた。

きみの言うとおりにニーナは街に来てる。

安ホテルに泊まって今夜で五泊目。

きのうの夕方、きみが見かけたのは、

たぶんニーナだ。

サイモン

やっぱり！

みんなに会わないんですかって声をかけたのに、

素っ気なく街のほうへ歩いていったよ。

だれにも会うつもりはないだろう。(間)

彼女の親たちは家出娘を許してないからね。

マリア

(登場して) コースチャ：ここにいたのね？

トリゴリンさん：

(サイモンに) なにやってるのよ…

トリゴリン

(コースチャに近づく) きみのママから聞いたよ、

昔のことは水に流して、

ぼくへのわだかまりは消え去ったと。

コースチャ

(トリゴリンに片手を差し出す) … (握手)

トリゴリン

きみの新作が載った雑誌を持って来た。

コースチャ

(受け取りながら) それはわざわざどうも。

トリゴリン

ペテルブルクでもモスクワでも大評判だ、

みんなきみのことを聞いてくるー

どんな人物か、歳はいくつか。

だれも正体を知らないし、

ペンネームだから本名もわからない。

謎の作家だ、きみは。

コースチャ

長くいるつもりですか？

トリゴーリン

いや、あしたモスクワに帰ろうと思ってる。
相変わらず、仕事、仕事というわけだ。

コースチャ

：

トリゴーリン

たしか、きみが芝居をやった場所があったね？
つぎの小説の舞台にしようと思ってるんだ。

記憶を呼び覚ましておかないと。

マリア

(サイモンに) さあ、行って：

サイモン

わかった、歩いて帰る。

まあ、ほんの二時間半だ。

おやすみ。(妻の手にキス)

みなさん、おやすみなさい。

赤ちゃんがいるんで失礼します。(一礼して退場)

マリア

(コースチャに) 夜食にしましょう。

コースチャ

先に行つて。

ぼくは少しだけ仕事をしたいから。

マリア

じゃあ：(トリゴーリンと別の場所へ)

コースチャ

(雑誌をめくりながら) 自分の小説だけ読んだらしい、
ぼくのページは開いてもない：

外は真つ暗じゃないか！

胸が騒ぐ、どうしてだ？(舞台後方へ)

トリゴーリン

(別の場所で) 彼はあまりうまく行っていませんね。
まだ自分の文体を見つけていないんでしょう。

内容も漠然としてはっきりしない、

ときとして理性を失ったかのようなでもある。

だからせっかくの登場人物が死んでしまう。

そう言えばお預かりしているものがありました。

トリゴーリン

なんでしたっけ？

マリア

かもめ…いつでしたかコースチャが撃ち落とした。剥製にしたいとおっしゃいましたので。

トリゴーリン

いや、覚えがない。

(考えて) 覚えがない。

コースチャ

(雑誌を見ながら舞台前方に戻って)

新しい形式なんて言っておきながら、

どんどん古臭くなってる！

(原稿を読む) 「壁に貼られたポスターが物語る…」

「青ざめた顔は黒髪に縁どられ…」

なんて陳腐な！(線を引いて消す)

トリゴーリンならこうは書かない、

もつとすつきり表現できる！

ああ、わかってる、頭ではわかってるんだ、

古いか新しいかは問題じゃない。

形式にこだわる必要なんかない。

肝心なのは、心からの表現、

あふれだすものを書くことだ。

(ノックする音) なんだ？

(舞台後方をのぞく) なにもない。

だれか階段を駆け下りた。

(呼びかける) そこにいるのはだれ？ (退場)

四幕二場 「ワーニヤ伯父」 4幕より

ワーニヤ

ひとりにしてくれ、構われたくない。

アーストロフ

きみが盗ったものを返してもらわないと

帰るに帰れないんだ。

ワーニヤ
ぼくはなにも盗ってない。

アーストロフ
とぼけるな。

ワーニヤ
早く帰らせてくれ。

アーストロフ
なにも盗ってないって。

ワーニヤ
じゃ、もうちよつとだけ待ってやる。

アーストロフ
そのあとは力づくでも取り返す、きみをフン縛っても。

ワーニヤ
これは本気だ。

アーストロフ
好きにしろ。(間)

ワーニヤ
あれだけ撃ちながら一発もあたらないなんて！

アーストロフ
情けない。

ワーニヤ
いつそのこと自分の頭をぶち抜けばよかったじゃないか。

アーストロフ
それなら外さなかっただろうに。

ワーニヤ
(肩をすくめて) おかしいじゃないか。

アーストロフ
ぼくはひとを殺しかけたのに、

ワーニヤ
だれも警察を呼ぼうとしない

アーストロフ
つまりぼくを気ちがい扱いしているわけか。

ワーニヤ
(毒々しい笑い) このぼくが気ちがいで、

アーストロフ
大学教授のお面をかぶって

ワーニヤ
正体をごまかしてるやつが真人間か？

アーストロフ
わざわざ年寄りの嫁になって

ワーニヤ
白昼堂々浮気をするような女が真人間か？

アーストロフ
ぼくは見たんだ、ちゃんとこの眼で、

ワーニヤ
きみがあの女を抱いてるところを。

アーストロフ
ああ、ぼくは彼女を抱いていた。

ワーニヤ
きみたちのような人間を生かしておくなんて。

アーストロフ
なにをバカなこと。

ワーニヤ
しようがないだろ、気ちがいなんだから。

アーストロフ
きみは気ちがいじゃない、根性曲がりだ。

ワーニヤ
ただし根性曲がりというやつは、

アーストロフ
現代では人間のノーマルな状態だからね、

ワーニヤ
すなわちきみはまったくノーマルな男だよ。
(両手で顔をおおう) わかったたまるか、この屈辱！
恥ずかしさで死にそうだ！

(うなだれて) 一体どうしたらいい…

アーストロフ
まあ、しかたがないさ。

ワーニヤ
ああ、もう、やりきれない…

ぼくはあと何年生きる？ 二〇年か？ 三〇年か？

(アーストロフの手を握って)

どうやって生きていけばいいんだ。

教えてくれ、一体どうしたら人生をやり直せる？… (泣く)

アーストロフ
(腹だたく) いまさらやり直しもなにもあるもんか。

きみも、ぼくも、これでおしまいだ。

絶望的というべきだ。

ああ、終わったんだ。

ワーニヤ
なんとかしてくれ…

(胸をさして) ここが焦げついたように苦しい。

アーストロフ
(どなる) もうあきらめろ！

(言葉を柔らげて) 百年後二百年後の人間たちが、

われわれの虚しい人生を軽蔑できるくらいに進んでいけば、
未来は幸せになっているということだ。

ぼくたちに残された唯一の希望は、

棺桶のなかでいい夢を見ることしかないが…

(早口に) しかし、こんなことでごまかされるか。

さあ、早く返せ。

なにも盗りやしないというのに。

アーストロフ
いや、ぼくの薬箱からモルヒネの壺を盗った。 (間)

もし、どうしても自殺したければ、

森のなかでズドンとやればいい。

あのモルヒネだけは返してもらおう。

ぼくがきみに渡したように言われては困る。

きみの死体解剖をするのはぼくなんだ、
不愉快な思いはしたくない。

(登場して) …

ソーニヤ
好きにさせてくれ。

アーストロフ
(ソーニヤに) ソーニヤ、きみの伯父さんは、

ぼくの薬箱からモルヒネを盗んでおきながら、
返してくれないんだ。

言ってくれよ、いい加減にしろって。

ぼくはこんなことをしてる場合じゃないんだ。

もう帰らなくちやいけない。

伯父さま、ほんとなの？ (間)

アーストロフ
間違いない。

ソーニヤ
出して！

(やさしく) ね、返して、ソーニヤ伯父さん！

あたしだって同じくらい不幸かもしれないよ。

でも、我慢して、我慢して、

自然に一生の終わりが来るまで我慢する。

伯父さまもそうして。

お願い、返して！ (泣く)

我慢してよ、伯父さま！

ソーニヤ
(薬瓶を出し、アーストロフに渡す) 持っていけ！

(ソーニヤに) 働こう、いますぐなにか仕事にかかろう。

じっとしてはられない…

ええ、働きましょう。

お父さまたちが出発したら、仕事にかかりましょう。…

(薬瓶を薬箱に納め、革紐をしめる) さあ、これで帰れる。

…

アーストロフ
(登場して) ソーニヤ、ここにいたの？

あたしたち、もう出発しますから。

主人のところへいらして。

ソーニヤ
お別れを言いたいそうですから。
行つてらっしゃい、伯父さま。

(ワーニヤの背中を押して)
お父さまと仲直りしなくちや。そうでしょう。
(ワーニヤと別の方向へ退場)

エレーナ
ご機嫌よう。

アーストロフ
約束どおり、もうここへは来ないで。
ええ、約束します。(間)

エレーナ
(エレーナの手をとって) 驚きましたか?
ええ。

アーストロフ
あなたはここに残ったらどうです?
そしてあした、あの森の番小屋で：
いま、堂々とあなたの前に立てる理由がわかる?
ここを出て行くと決めてるからよ。

エレーナ
あなたへの要求はひとつだけ。
あたしを見直してちょうだい。
あたしはあなたが思うような女じゃないの。
(じれったそうな身ぶり) いいですか、
アーストロフ
あなたはこの世でなにひとつ、
すべき仕事のないひとだ。

エレーナ
都会に出るより、自然の懐にいだかれてるほうがいい。
少なくともそのほうが詩的だし、ずっと美しい。
ほんとうに聞けば聞くほど腹がたつ。
きつと、いい思い出になるわ。
二度と会うことはないでしょうから—
だから思いきって言うわ。

あたし、あなたに恋していました。
さあ、握手をしてお別れしましょう。
恨み合うことなしに。

アーストロフ

(手を握って) ええ、出発すればいい。

ぼくたちの喜劇はこれにて幕です!

エレーナ

(アーストロフの胸ポケットから鉛筆をとり)

この鉛筆、記念にいただくわ。

アーストロフ

せつかく知り合ったのに。

もう二度と会うこともないなんて。

これが人生というものか。

またワーニヤがバラを持って入って来ないうちに、

もう一度…(頬にキス)

エレーナ

さようなら。(あたりを見回して)

一生に一度!(いきなり抱きしめる)

思い切ったわ。(そのまま三秒。途端に離れる)

もう行かなくちや。

アーストロフ

早く。

仕度ができているなら、早く行ってください。

エレーナ

だれか来る。(ふたり、聴き耳をたてる)

アーストロフ

芝居は終わりだ!

四幕三場 「三人姉妹」 4幕より

(プローゾロフ家の庭先)

イリーナ

ねえ、フォードル、

きのう劇場の前でなにがあったか教えて。

なぜか男爵は話してくれないの。

フォードル

噂で聞いた話じゃ、

男爵の同僚だった中尉が男爵に喧嘩を売ったとか…

イリーナ

それで?…

フォードル

まあ、たしかにくだらないう噂にちがいない。

どうやら中尉はイリーナに恋をしていた―
だから中尉は男爵を恨んでいたというわけだ。
そりやまあもつともだ、イリーナはいい子だから―
マーシヤに似てね。

イリーナ

食事が済んだら荷物を送り出して、
あした結婚して、引っ越しよ。

そこでわたしは学校勤め―

きつとすてきな生活が始まるわ。

教員試験に受かったとき、うれしかった！

あんまりうれしくてわんわん泣いたのよ、わたし。

フョードル

心から幸運を祈るよ。

ああ、あしたは軍隊も去って行く…

これでもかかも元どおりだ。

なのに、あの噂が胸につかえてモヤモヤする…

フョードル

なに、くだらない噂だよ。

「タララ・ブーム・デイ・エイ」

(遠くから) 校長先生のお帰りよ！

フョードル

われらの校長先生、おかえりなさい！

(マーシヤ、登場。)

別の場所からアンドレー、赤んぼうを抱えて登場)

マーシヤ

(独りごとのように) 幸せを手に入れては

ときどき自分から手放していると、

あたしみたいにどうしようもない女になる。

ほら、あれがあたしのお兄さん、アンドレー。

あたしたちの希望という希望が

ものの見事に台無しになった！

何千人もが力を合わせて吊り上げようとした教会の鐘が、

突然、理由もなくガシャンと落ちて壊れちゃった―

そんな感じ。

アンドレー

(マーシヤに) ゆうべ劇場の前であつた
喧嘩の話を知ってるか？

中尉が男爵に決闘を申し込んだらしい。

十二時半に向こう岸の森のなかで：

中尉にとっては三度目の決闘だつてさ。

でも、男爵のほうは――

マーシヤ

なに言ってるの、やめさせてよ――

男爵、ケガをするわ：殺されるかも。

アンドレー

市会議員として意見すると、

決闘は野蛮かつ不道德な行為だ。

認めるべきじゃない。

マーシヤ

とてもみんなと食事なんて気分になれない：

ヴェルシーニンが来たら知らせて。

ああ、渡り鳥：南に飛んでいく。幸せね。(去る)

アンドレー

さびしくなるなあ。

軍人たちも妹もいなくなる。

ここに残るのはぼくひとり。

ナターシヤは：ナターシヤは：

正直で、上品で、やさしい女性だけど、

同時に怪物だ――人間じゃない。

ぼくはどうして彼女を愛してるんだろう。

どうして愛してたんだろう。

フョードル

おーい、マーシヤ！ マーシヤ！

トウーゼンバツハ

この町じゅうでフョードルだけでしょうね。

軍隊が出て行くのをよるこんでるのは。

イリーナ

そうね：さびしくなるわ。

トウーゼンバツハ

(時計を見ながら) イリーナ、

ぼくはちよっと出かけてきます。

イリーナ どこへ行くの？

トウーゼンバツハ 友人に別れのあいさつを。

イリーナ ウソ：なんだかいつもとちがう。

ゆうべ劇場の前でなにがあったの？

トウーゼンバツハ 大丈夫、一時間で戻ります―きみのぴったり隣に。

(手にキス) きみに恋して五年になるけど、

まだ見なれることがない―

きみがどんどんキレイになっていくから。

ぼくはあしたきみを連れてここを出ます。

ふたりで働いて、おカネを貯めて、夢を現実に。

きみを幸せにする。

ただ、困ったことがひとつ―

きみはまだぼくを愛してない。

イリーナ それはどうしようもないわ。

生まれてから一度も愛したことがないの。

愛することにあこがれたまま―

わたしの心は鍵のかかったピアノみたい、

鍵がどこかにいって見つからない：

トウーゼンバツハ だからと言って、

ぼくたちには辛いことも怖いこともありません。

なくした鍵のせいで、

ゆうべはちよっと眠れなかったけど。

イリーナ …

トウーゼンバツハ あれ？ なにか言ってくれないんですか？

なにか言ってください：

イリーナ なにを言えばいいの？

トウーゼンバツハ (時計を見て) 行かなくちゃ、もう時間です：

並木のなかの一本が立ち枯れてる。

ほかの樹々といっしょに風に揺れて：

たとえばぼくが死んだとしても―

あの木のようにみんなといっしょにいるんだろうな。

じゃあね、イリーナ：（両手にキス）

きみからもらった手紙の束は、

ぼくの机のカレンダーの下にある。

イリーナ わたしもいっしょに行っていていい？

トウゼンバツハ それは無理です。（イリーナから離れる）

（振り返って）イリーナ。

イリーナ なに？

トウゼンバツハ コーヒーを飲み忘れました。

戻ったら飲めるようにしておいてください。（退場）

「プロゾロフさま、書類にサインを！」

「書類にサインを！」

「書類にサインを！」

アンドレー

書類、書類って、ああ、もうたくさんだ！…

この町の歴史は二百年、人口は一〇万人―

過去にひとりの偉人も学者も芸術家も生み出してない。

住人はただ食って飲んで眠って死んでいく。

地獄のような退屈から逃れるために、

他人の噂や、酒や、ギャンブルや、

ねたみそねみで暇つぶし。

妻は浮気し、夫は見知らぬふり。

腐った親の影響は子どもに及び、

生まれ持った才能を押しつぶす。

せつかくの子どもたちも親たちと同じ、

哀れな人生を歩んでいくんだ。

「プロゾロフさま、書類にサインを！」

アンドレー
ナターシャ

うんざりだ、こんなこと！…
(子どもを抱きながら出て来て) 大声出さないで！
ソーフオチカは寝てるじゃないの！

アンドレー

起きちゃうでしょ！
大声なんか出してない！

「プローズロフさま！」

アンドレー

サインならいくらでもしてやる！
どんな書類でも片っ端からもって来い！

(ヴェルシーニン、オーリガ、イリーナ、登場)

ナターシャ

いい子ね、ボービク…このひとだあれ？

オーリガ

：

ナターシャ

オーリガおばちゃんでちゅよう…

「こんにちは、オーリガおばちゃん！

ばいばーい！」…(退場)

オーリガ

：

ヴェルシーニン

(時計を見て) そろそろ旅団が出発します。

どうかくれぐれもお元気で…

オーリガ

ええ…

ヴェルシーニン

マーシヤは？

イリーナ

探してきます。

ヴェルシーニン

ありがとうございます…ただ、あまり時間がありません。

イリーナ

マーシヤ！ マーシヤ！

ヴェルシーニン

なにごとにも終わりが来るものですね—

オーリガ

(時計を見て) ここにすっかり馴れてしまった。

いつかまたお目にかかれるでしょうか？

ヴェルシーニン
オーリガ

おそらく、再会はないかと。
みなさんがここを離れていくと、
なにもかも思い出になってしまうんですね、
なにひとつ思いどおりにならないまま、
校長になってしまったせいで、

モスクワへ帰ることもできなくなって…

ああ：マーシャはどこへ行ったのかしら？

ヴェルシーニン

人生はつらい！（高らかに笑う）
いまここに希望は見あたらない…

しかし未来には光が見える。

（時計を見て）時間です。行かなければなりません。

かつて人間たちは戦争に明け暮れていました。

いまやそれは昔話：戦争の愚かさをだれもが知りました。

軍隊は英雄になることはなく、

巨大な空虚のなかを旅する時代です。

そのむなしさを埋めるものはいまのところありません。

まだだれも発見できていない。

どうか早く見つけてほしい。

このむなしさを埋め尽くしてほしい。

（イリーナ、マーシャとともに登場）

ヴェルシーニン

マーシャ

：
さようなら：愛しいあなた：

（ふたり、抱き合い、長いキス）

オーリガ

マーシャ

もういいでしょ：
（すすり泣く）：

ヴェルシーニン

もう行かなくては：

オーリガ、マーシヤをお願いします。

(オーリガの両手にキス。もう一度マーシヤを抱き、退場)

オーリガ

(追いつがるマーシヤを止めて) やめなさい、マーシヤ！
いけないわ。

フョードル

(登場して) いいんです、泣かせてやりましょう。

マーシヤ、きみはぼくの妻だ。なにがあっても。

ぼくはきみを責めたりしない…

ぼくたちは元どおりの暮らしにもどるだろう…

あしたになれば、きょうまでのことは忘れる。

ひとことだって口にするのではない、

マーシヤ

(なにやら口ずさんで) …

オーリガ

だれかこの子に水をお願い！

気をしずめて、マーシヤ…

マーシヤ

(口ずさんで) …

あたし、頭がおかしいのよ…

人生台無しにしちやった…

もうなにもいらぬ…

イリーナ

マーシヤ…

オーリガ

落ちついて、マーシヤ。

なかに入りましょう。

マーシヤ

いや、戻らない。

あたしはもう二度とあの家に戻らない。

イリーナ

じゃあここで、しばらく座っていきましょう。

フョードル

ほら、きのう三年生から取り上げたんだ。

(仮装用の大きな髭をつけて) あの悪ガキども、

ドイツ人教師をからかうつもりだったらしい。

たしかに似てるだろ？ (笑う)

マーシヤ

ほんと…あなたのお友だちにそっくり…

オーリガ

(笑う) いやだ、ほんと…

イリーナ

わたしもわかる、あのかたね。

フョードル

そうなんだよ、そっくりなんだ！

ナターシャ

(登場して) イリーナ、あなたもあした出発なのね。

残念だわ、もう少しいてくれたら… (フョードルを見て)
ぎゃああ！ (フョードル、髭をとる) 先生！

なんなのあなたたち！ びっくりさせないでよ…

イリーナ… いなくなるなんて信じられない。

あなたがいなくなったら、

空き部屋にはアンドレーに移ってもらおうと思ってるの。

そうすればアンドレーの部屋は

ソーフオチカの部屋にできるでしょー

ソーフオチカったらね、賢い子なの。

くりくりした目であたしを見ると

「ママ！」っていうの。

フョードル

ああ、あの子は賢いなあ、ああ、賢い！

ナターシャ

あしたからひとりか… (ため息)

まずあの並木を切ってしまわなきゃ、バツサバツサと。

フョードル

バツサバツサと…

ナターシャ

この庭の木も全部いらないわね、

木って夜になると不気味じゃない？

それから庭には花を植えてもらうわ、

いい匂いのする花を…

あら、こんなところにコップ？

なんで庭にコップが落ちてるの！

ウチの女中たちはなにやってるんだらう。

ちよつと！ これはどういうこと！！ (退場)

フョードル

大爆発だ…

四幕四場 「かもめ」 4幕より

(コースチャ、ニーナとともに戻って来る)

コースチャ

(激しく感動して) ニーナ、きつとここへ来ると思ってた。

(ニーナの帽子とケープをとる)

ああ、ぼくのニーナが戻って来た!

ニーナ

(コースチャの顔を見つめて) あなたの顔、よく見せて。

コースチャ

こうやってきみを見つめてることが

不思議でしようがない。

どうしてももっと早く会いに来なかった?

戻ってきたのは一週間前だろう?

憎まれてると思つて怖かった。

ニーナ

毎晩同じ夢を見るの――

あなたはわたしを見つめてる、

でもわたしだと気づいてない。

この夢がわかる?

でも勇気がなかった。

座つてもいい?(ふたり、腰を下ろす)

ここはほんとにあったかい、いい気持ち。

ツルゲーネフがこんなこと書いていたわ、

「こんな夜に屋根と温かな部屋がある者は幸せだ」

わたしはかもめ…いいえ、違う。

(額を拭う) いま、わたしなにをしゃべってた?

そう、ツルゲーネフ。

「主よ、寄る辺なくさすらうすべての者を救いたまえ」

(むせび泣く)

コースチャ

もう泣かないで、ニーナ!

ニーナ

いいの、これで楽になれる。

この二年間、一度も泣かなかったんだから。
ゆうべこの庭に来たの、

あの劇場が残っていたらと思って。

そうしたらまだ建ってた、わたしたちの劇場が。

そのとき涙があふれだした。

胸につかえていたものが流れて、

霧が晴れたみたいだった。

ほら、もう泣いてないでしょ。

(コースチャの原稿を見て) あなた、作家になったのね。

あなたは作家、わたしは女優。

ふたりとも激しい渦に巻き込まれてしまった。

あしたの始発で北へ向かうの。

三等列車で出稼ぎの男たちと相乗りで。

向こうに着いたら、

地元の偉い人たちの相手をしなくちゃならない。

夢見た人生とは大違い。

どうしてそんなところに？

コースチャ

ニーナ

この冬のあいだ契約をしたの。

そろそろ行かなくちゃ。

コースチャ

ニーナ…

ぼくはきみを呪い、きみを憎んで、

手紙も写真も破り捨てた。

でもわかったんだ、

ぼくの魂はきみとは切り離せない、

一日たりとも、いや、一分だって一秒だって、永遠に。

愛してるんだ、ニーナ。

きみが消え去り、何度もきみの名前を呼んだ、

きみが歩いた地面にキスをした。

どこにいてもきみの顔が目に見えかぶんだ、

(呆然と) なんてそんなことが言えるんだろう—

ニーナ

コースチャ

なぜ？

ニーナ、ここに残ってくれないか。頼むよ。
それが無理ならぼくもいっしょに行かせて。

(ニーナ、急いで自分の帽子とケープを身に着ける)

ニーナ

クルマを待たせてるの、裏口に。

見送らないで、ひとりで行けるから。

(涙をこらえて) お水をくれる？

コースチャ

(水を差し出す) これからどこへ？

ニーナ

街へ。(間)

なぜ？

わたしが歩いた地面にキスをしたなんて。

愛してもらう資格なんてないのに。

疲れた。休みたい。お願い。

(顔をあげて) わたしはかもめ…いいえ、違う。

わたしは女優。そうよ、そう。

(トリゴーリンのいるほうを向いて)

いるんでしょ？ ボリス・トリゴーリン…

(コースチャのほうに戻って)

どうだっていい！ほんと！

彼は演劇を信じてなかったの、

いつもわたしの夢を笑い飛ばした。

そのうちわたしも信じる力を奪われて、

情熱をなくしてしまった。

代わりに愛や嫉妬の悩み、

それから赤ちゃんを育てなくちゃっていう不安が

押し寄せて来た。

あなたにわかる？

自分がどうしようもない演技をしてるって

感じながら舞台に立ってる気持ち。

わたしはかもめ：いいえ、違う。

(額を拭う) いま、わたしなにをしゃべってた？

そうよ、舞台のこと。

コースチャ、わたしは女優になった。

わかったのよ、理解したの。

わたしたちの仕事って、

演じることも書くことも同じ、

ほんとうに大切なのは―名声を得ることじゃない、

耐え抜くことよ。

自分が背負った十字架に耐えて、

信念を持つこと。

わたしは信念を持ったの、

だからもう傷つかない。

演じることはわたしの天命、

そう思えるから、もう人生は怖くない。

(悲しげに) きみは道を見つけて、行き先を知ったんだね。

ぼくはまだ答えを探して、

夢と幻の混沌をさまよってる。

だれのために？ なんのために？

ぼくは信念を持ってない、

天命がなにかもわかってない。

行かなくちゃ。さようなら。

遅くなっちゃった。立ってるのが精一杯。

もうへとへと、お腹も空いた。

待ってて、なにか食べるものを持って来る。

いいの、やめて。

ひとりで行けるから。

トリゴーリンに会ってもなにも言わないで。

わたし、彼を愛してる―

いまのほうがもっと彼を愛してる。

この体が焼けつくくらい、

どうしようもないほど彼を愛してる。

コースチャ、あのころはよかったと思わない？

覚えてるでしょ？

人生のなにもかもがまっすぐで、あつたかくて、

無邪気であわせだった。

なんだったのかしら、

可憐で繊細な花のようなあの感覚―

覚えてるでしょ？

(暗誦する) ヒトもライオンも、ダチョウも雷鳥も、

角を生やした鹿も、ガチョウもクモも、

水にすむ無言の魚も、目に見えないあらゆる生物も、

生きとし生けるものはみな、

哀しみの繰り返しを止めて死に絶えた。

(ニーナ、発作的にコースチャを抱きしめる、5秒。

走り出て行く)

コースチャ

(間をおいて) だれかが庭で彼女を見て、
ママに言いつけたりしないといいけど。

(コースチャ、無言のまま原稿を引き裂く。

そのまま舞台上に残って)

四幕五場 「ワーニヤ伯父」 4幕より

ソーニヤ

みんな、出て行ったわ…

ワーニヤ

(帳簿をつけながら) ぼくは辛いよ。

ええと、締めて八十五万と二五〇〇…

この辛さをわかってくれるか！

ソーニヤ

ひとのために働きましょう。

いつかそのときが来たら天国で神さまにお話しするの、

あたしたちがどんなに苦しかったか、

どんなに泣いたか、残らず全部。

神さまは気の毒に思ってください。

そのときこそ、伯父さまにもあたしにも、

光輝く生活が始まるわ、

眩しすぎるって声をあげるくらい。

そしていまの不幸せを懐かしく振り返れば、

心から安らぐときが来る。

あたし、ほんとにそう思うの、ワーニヤ伯父さん。

そう思う。(伯父の前に膝をついて)

心から安らぐときが来る！

この世の悪いものはみんな、

悩みも、苦しみもみんなとけてなくなる。

あたしたちの暮らしは、

お母さまが撫でてくれたような、

やさしいものになるんだわ。

あたしそう思うの、どうしてもそう思うの。

(ハンカチで伯父の涙を拭く) 伯父さま、泣かないで…

ほんとうにうれしいことや楽しいことを、

知らなかったのよね、わたしたち。

でも、もう少しよ、ワーニヤ伯父さん。

もう少しの我慢。

心から安らぐときが来る…(伯父を抱く)

心から安らぐときが来る！

四幕六場 「三人姉妹」 4幕より

(銃声)

人びと

「いまのはなんの音？」

「さあ…どこかで薬瓶でも破裂したか？」

「鳥じゃなかった？—カササギとか」

「あるいはエピホードフか？」

オーリガ

軍隊が旅立って行くのよ…

マーシヤ

家族を見送るような気がするわ…

さようなら！

フョードル、あたしたちも帰りましょう—

帽子とショールはどこかしら？

フョードル

家のなかだ…とつてこよう。(退場)

オーリガ

みんなもウチに入りましょう。

それぞれ仕度があるでしょう。

「オーリガ…」

オーリガ

なんなの？

「どうしましょう…」

「タララ・ブーム・デイ・エイ」

「なんて言えればいいか…」

オーリガ

なんてこと！

「もううんざり…」

「もうたくさん…」

「タララ・ブーム・デイ・エイ」

「これ以上なにも言いたくない…」

「どうだっていいけど！」

マーシヤ

「タララ・ブーム・デイ・エイ」
どうしたの？

オーリガ

(イリーナを抱きしめる) イリーナ…
こんなに恐ろしい日があるかしら…
なんて言えばいいのかわからない…
なによ、早く言って…

イリーナ

だれでもいいから！
なにがあつたか教えてよ！ (泣く)
「川向こうの森のなかで…」

「決闘―」

「決闘―」

「決闘があつた…」

「男爵が―」

わかつてた…

イリーナ

「男爵が―」

わたし、わかつてた…

イリーナ

「殺された…」

M「タ・ラ・ラ・ブーム・デイ・エイ」

♪ ラララララ ラララララ

ラララララ ラララララ

ラーララーララーラ

(オーリガ、マーシヤ、イリーナ、肩を寄せ合う)

マーシヤ

音楽のなか、

あたしたちは取り残される。

お父さまを送ったときもそうだった…

あたしたちだけで、またあたしたちだけで、

イリーナ

生きなくちゃ。

いつかわかるときがくるのよね？

こんなに苦しまなければならぬ意味が…

わたしたちに隠されていた秘密がすべて、

秘密じゃなくなる日が来るのよね？…

それまで生きていかなくちゃ。

あたしを先生と呼んでくれる生徒のために、

あの子たちのために働かなくちゃ。

オーリガ

あの音楽は—

わたしたちへの音楽だわ…

きょう一日を乗り越えて、

あしたを生きる勇気をくれる。

ああ、わたしたちが生き抜いて

永遠にこの世を去ってしまったら、

忘れられてしまうのかしら？—

わたしたちの声や顔や、

何人姉妹だったかということも。

いいえ、それでもきくと、

いまのわたしたちの苦しみは、

未来に生きるひとたちの喜びに変わるのよ。

そのときは人びとが、

この時代を生きたわたしたちを思い出して、

ありがとうと思ってくれる…

祝福してくれる…

(妹たちを抱いて) なんてだろう、こんなこと言って—

わたしたちの人生はまだ終わってないわ。

生きていかなくちゃ。

音楽が力をあたえてくれるもの。

もうすぐよ…

もうすぐわかるときが来る。

いまのわたしたちの苦しみは、
なんのためにあるのか―
もうすぐわかる 때가来る。

(フョードル、登場。)

マーシヤに帽子とシヨールをかける)

♪ 鳥たちは 遠い国へ

樹々はただ 風に揺れて

ひとは 魂の旅 繰り返す

果てなく

♪ 夢は彼方に からだはここ

ふたつのいまをさまよいながら

泣き顔で

♪ 少しだけ 泣けばいいさ

笑えたら 夜は明けてゆく

終わりになき旅

(あらたな旅) (いつもの)

変わらぬ日々

(変わらぬ日々) (変わらぬ日々)

生きた証をたしかめながら

(生きた証をたしかめながら) (わたしはここにいた)

魂は旅をする

(ララララ ララララララ) (ララララ ラララララ)

立ち止まること知らず

(ラララ ラララララ) (ララララ)

忘れられることおそれながら

(ラララ ラララララララ)

涙をこらえて

♪ 泣くといひさ(タララ・ブム・デイ・エ)
泣くといひさ(タララ・ブム・デイ・エ)

四幕七場 「桜の園」 4幕より

ロパーヒン

(時計に目をやって) みなさん、仕度はいかがですか？

一〇分後にはここを出ます—

仕度がまだのかたはお急ぎを。

ペーチャ

(登場して) わかってますよ、もう出発でしょ？

荷物の準備も整ったけど…

ぼくのオーバーシューズ、どこかで見てませんか？

アーニャ！…ぼくのオーバーシューズ、見てないかな？

おれも途中まできみたちといっしょの汽車で行く。

これから北へ仕事に向うんでね。

向こうでひと冬過ごすことになりそうだ。(ため息)

一日も早く仕事を始めないと…

この手が自分のものじゃなくなりそうだ。

ここを出ればすぐに戻れるんでしょ—

あなたの輝かしい労働に。

ロパーヒン

行き先は…モスクワ？

ペーチャ

ええ。みんなといっしょに街に出て、

そこからあしたモスクワへ。

ロパーヒン

大学生活がお待ちかねだ。

教授たちがよろこぶぞ—

「ペーチャ・トロフィーモフが戻った、

やっといつもの講義が再開できる！」

ペーチャ

ぼくの担当教授は定年退職してもういません。

美人の若妻と再婚して田舎に引っ込みましたから。

ロパーヒン

いったい何年大学にいるんだ？

ペーチャ

大きなお世話ですって。

ほかに言うことはないんですか？

ここを離れたらもう二度と会わないですよー

ぼくだったら…よし、別れる前にひとつ忠告します。

大げさに両手を広げる仕草はやめたほうがいい。

あなたは手を広げて見栄を張る癖がある、

直したほうがいい。

別荘地の計画もそれと同じだー

木を切れ、別荘を建てろ、手に入れろ、破壊しろ…

同じだ…全部…(間)あなたの癖だ…

だけど、ぼくはあなたのことが好きだー

あなたはとてもきれいな手をしてる、

それに、魂も、きれいだ。

ロパーヒン

(ペーチャを抱きしめて)

ペーチャ、最後になるなーありがとう。

いろいろと感謝してるーこれでお別れだ…

(ペーチャのポケットに札束を入れようとする)

ペーチャ

なに？

ロパーヒン

とっとおいてくれ。

ペーチャ

なんだよ、なんのために？

ロパーヒン

旅にはカネがいるだろー

ペーチャ

いりませんから。

ロパーヒン

いつもカネに困ってるじゃないか。

ペーチャ

いいえ、もう違います。

ちやうど翻訳料をもらったところなんです。

こっちのポケットに入ってますから…

いま必要なのは、オーバーシューズです。

ワーリヤ

(控えの間からオーバーシューズを放り投げ)

ほら―あつたわ、持って行って!

ペーチャ

ワーリヤ、これはぼくのじゃない。

なんでぼくに怒ってるんだ?…

ワーリヤ! ワーリヤ!

ぼくのオーバーシューズじゃない。

ロパーヒン

この春、三〇〇〇エーカーの土地にケシの種をまいてみた。

それで儲けた四億―風が落としていったようなもんだ…

いまのおれには必要なカネじゃない。

だから借りておいてくれ。

借りるならいいだろう?

おれは農夫の出だ、こういうことしかできないんだ。

遠慮するな。

ペーチャ

あなたの父親は農夫で、ぼくのところは薬屋―

それがなんだっていうんです?

なんの証しにもならない。

(ロパーヒンが札束を差し出すのを見て)

やめてください、いりません。

たとえ二〇億でも受け取りません。

だって、ぼくは自由な人間だから。

人間はカネを掴まなくても前進できます。

いまよりもっと高いところにある幸福や

真実やあらゆる目的に向かって進んで行ける―

ぼくはその行進の最前列にいるんです。

で、きみはその目的にたどりつくのか?

ロパーヒン

もちろん、たどりつきます。

もしもぼくがたどりつかないときは、

つぎのだれかに道を示すんです。

(樹を倒すチェーンソーの音)

ロパーヒン

時間だ：

たいそうな議論をぶつけあつてるあいだも、
人生はどんどん短くなつていく…
おれは我を忘れて何時間も働いたあと、
たまに妙におだやかな気分になつて、
長年の謎がとけた気がする—
自分がなんのために生きてるのか—
気づくことがあるんだ。
だがいまのこの国には、

その答えをひとつも持てない人間が
いったいどれほどいることか。(チェーンソーの音)

アーニヤ

(登場して) ママからのお願いです。

あたしたちがここを出て行くまで、
樹を切るのを待ってもらえないでしょうか—
当然の要求だ—

ペーチャ

無神経にもほどがある。(退場)

ロパーヒン

もちろんです—すぐにやめさせます。
申し訳ない：(退場)

ヤーシヤ

(登場して) 災難磁石も見納めか：

ワリーヤ

(登場して) ヤーシヤ、

ヤーシヤ

お母さまがお別れを言いに行らしてらわ。(退場)
(片手を振りながら) かんべんしてくれ：
うつつうしいつたらありやしない。

ドウニヤーシヤ

(登場して) ヤーシヤ：

ねえ：どうして：こつち向いて(間)
なんで目を合わせてくれないの？ ヤーシヤ？…
あたしを捨てて行っちゃうの？ ヤーシヤ？…
あたし、捨てられちゃうの？

ヤーシヤ

(泣きだし、ヤーシヤの首にすがる)

おいおい、なにを泣いてんだ？

六日後にはもうパリだ。

あした急行に乗ったら、まっしぐら。

ヴィヴ・ラ・フランス！

ここはきょうが最後。

さらば田舎—さらば退屈—

これできれいさっぱりってわけ。

涙はひっこめろ—

泣きすぎっていうのは安っぽいだろ。

パリに着いたら手紙書いてね。

愛してるから…あなたを愛してるから—

あたしそんなに強くないんだから。

ヤーシヤ…

ヤーシヤ

ほらほら、みんな来るって—

アーニヤ

(独りごとのように) ああ、すっかり片付いた—

さようなら、あたしのおウチ—

冬を過ごして、春が来たら、消えていく—

わたしは幸せ…新しい暮らしが始まるんだから。

ママにとっても、みんなにとっても、

過ぎてみればこれがよかったと思えるはずよ。

領地が人手に渡ると決まったときは、

どうなることかと不安だったけど、

最後の最後は決断したんだから。

不安が落ち着いたら前より陽気になった。

ママはパリに行く、

あたしは女学校の入学試験を受ける。

そして合格したら、働くの。

働いてママを助けるから。

そしていっしょに本を読みたいの。

秋の夜長にいろんな本を―

そうすればいまよりもっと大きな世界が、
あたしたちの前に広がるから。

それからもうひとつ…（間）

ロパーヒンさん！

（登場して）申し訳ない…

いま、切り倒すのを止めてきました。

アーニヤ　お願い、最後にもうひとつ

ママの夢をかなえてくださらない？

ロパーヒン　マダムのお夢？

アーニヤ　あなたがワーリヤと結婚すること…

ママはいまでも夢を見てるわ―

ワーリヤはあなたを愛してるし、

あなたも気に入ってるでしょ―

それなのにどうしてすれ違ってきたの？

ロパーヒン　わかりません。

いつもおかしいことになってしまつて。

そうか…よし…やりましょう。

時間さえ許すならここで決着します。

みなさんが出発したあとでは、

もう結婚を申し込むことはないでしょう。

ありがとう。そう言ってほしかった―

時間がないわ、急いでね。

やっこの日が来た。

ワーリヤ！

こっちへ来て、ワーリヤ！（ヤーシヤとともに退場）

ロパーヒン　（時計を見る）ようし…

ワーリヤ　（部屋の荷物を調べながら登場して）

やんなっちゃう、どうしても見つからない…

ロパーヒン　なにをお探しですか？

ワリーヤ 自分で入れたものが見つからなくて…

ロパーヒン あの、あなたはこれから

どうするつもりですか？

ワリーヤ あたしのこれから？

プローゾロフ家のお手伝いに行くことにしました—

女執事って言うのかしら？

プローゾロフ家は遠いなあ—

ここから七〇キロありますよ。

ワリーヤ はあ。

ロパーヒン その…このお屋敷での暮らしも終わりましたね…

ワリーヤ どこいっちゃたんだろう？

トランクに入れたと思ったんだけど…

そうよ、もう終わったわ…

ロパーヒン ここへは二度と戻らない…

ぼくは北へ行きます、みなさんと同じ列車で。

だいぶ仕事がたまってるんで。

ここへはエピホードフを残して行きます。

彼を雇ったんですよ。

ワリーヤ それはよかったわね！

ロパーヒン 去年のいまごろを覚えてますか？…もう雪が降ってました。

それが、ことしは穏やかで、陽が射してる。

でもやっぱり気温は低くて、零下三度。

ワリーヤ さあ、知らないわ。(間)

このウチの寒暖計は壊れっぱなしだから…

エピホードフ(声) ロパーヒンさん！

ロパーヒン (その声を待っていたかのように)

なんだ？ いま行く！(退場)

M 「すれちがい」

ワリーヤ

♪ きのうもあしたもすれ違い

わたしとあのひとすれ違い

しあわせの鍵はどこかに

かくれて出て来ないの

北風吹くなか薔薇が咲き

春にはロマンスさようなら

人生はいつもすれ違い

わたしとあのひとすれ違い

アーニヤ

ワリーヤ…

ペーチャ

もう時間だ。

ワリーヤ

ごめんなさい、お母さま…

ごめんね、アーニヤ…

さあ、今晚じゆうにプローズロフ家に着かなくちや…

ロパーヒン

(登場して) みなさん、もう行かないと！

エピホードフ、おれの外套を…

あとは頼んだぞ。

エピホードフ

(かすれ声で) どうぞご心配なく、ロパーヒンさん…

ロパーヒン

なんだ、その声？

エピホードフ

さつき水を飲んだら、

なにか一緒に飲み込んだらしく—

ヤーシヤ

いいぞ、災難磁石！

(人びと、続々と旅立ちの仕度をして登場)

ペーチャ

みなさん、おそろいですか？

時間が迫ってます…

ワリーヤ

ペーチャ、あったわ、あなたのオーバーシューズ！

荷物にあいだに…

(涙声で) それにしたって、

なんでこんなにみすぼらしいの！

マリア

(登場して) トリゴーリンさん！

これです、さっき話した、れいの剥製。

たしかに、あなたのご注文です。

ロパーヒン (トリゴーリン)

(かもめを見つめて) 覚えがないなあ。

(少し考えて) まったく覚えがない。

ペーチャ

(履きながら) みなさん、行きましょう。

ロパーヒン

そちらにはだれもいませんね？ (鍵をかける)

このドアには鍵をします—

行きましょう。

アーニヤ

あたしのおうちに、さよなら—

人びと

「ワタシノオウチニサヨウナラ」

「ワタシノオウチニサヨウナラ」

アーニヤ

昔のあたしに、さよなら—

ペーチャ

新しい人生に、こんにちは！ (アーニヤとともに退場)

ロパーヒン

お別れです。

みなさん、お元気で—

また会いましょう— (退場)

(登場人物たち、仮設舞台に。

コースチャは銃を自らの頭にあてる)

(旅支度の人びと、タブローとなって。)

幕。